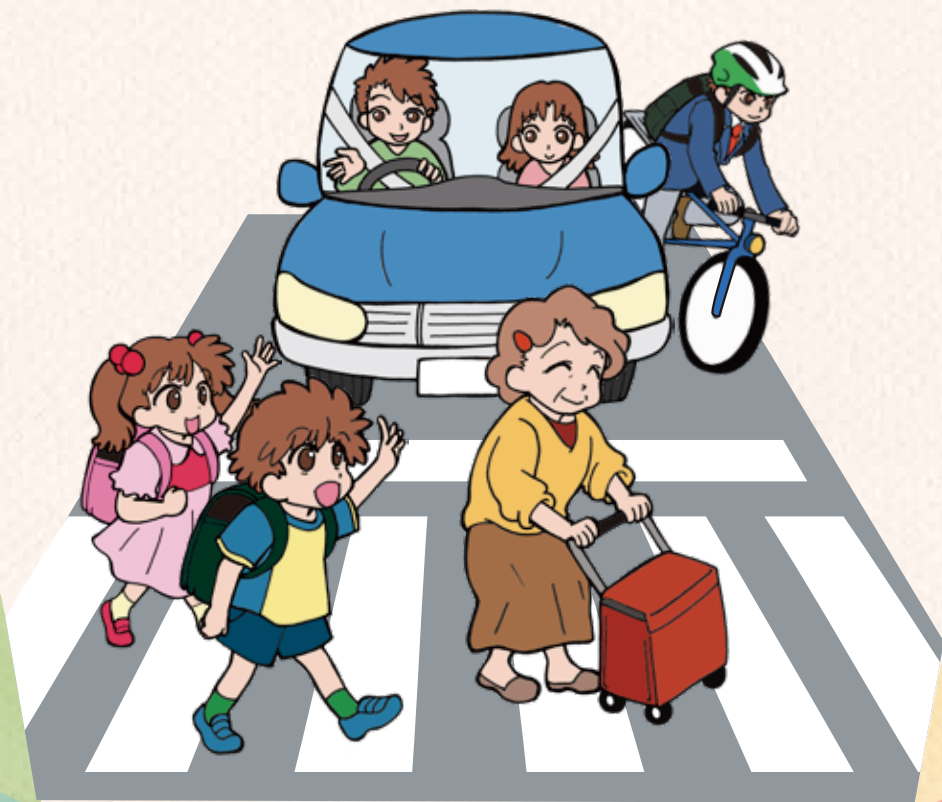


令和5年度

交通安全

ファミリー作文コンクール

優秀作品集



警察庁

令和五年度交通安全ファミリー作文コンクール優秀作品集の発刊に当たって

皆様には、日頃から交通安全活動に御尽力をいただいておりますことに対し、厚く御礼申し上げます。

さて、我が国の交通事故死者数は平成二十七年以降減少を続けていましたが、昨年の交通事故による死者数は、二千六百七十八人で、八年ぶりに増加に転じました。次代を担う子どもが犠牲となる痛ましい交通事故や、飲酒運転をはじめとする悪質・危険な運転による重大な交通事故も依然として後を絶ちません。政府が目標とする世界一安全な道路交通を実現するためには、各界各層の一層の連携した取組が必要と考えております。

交通事故は、国民の誰もが当事者となるおそれのある身近な問題です。安全で快適な交通社会を実現するためには、国民の皆様一人一人が交通ルールを守り、自動車や自転車の運転者、歩行者がそれぞれ相手の立場に配慮し、思いやりの気持ちをもって交通マナーを実践していくなど、積極的に交通安全に関わっていただくことが大切です。

「交通安全ファミリー作文コンクール」は、家庭、学校、地域等において交通安全について話し合ったこと、また、これらを通じて思ったことや感じたことなどについて、作文を通じて国民の皆様が共有することで、具体的な交通安全活動の実践につながる取組として四十五年の永きにわたり続いてまいりました。

今年度も小学一年生から中学三年生まで五千二百七十四点の応募をいただきました。

本書は、その応募作品の中から、最優秀作（内閣総理大臣賞）をはじめとする優秀作品をまとめたものです。この作品集を通じて、国民の皆様が交通事故のない社会を願う気持ちを共有し、そのことが更なる交通ルールの遵守と交通マナーの向上につながることを心から期待しております。

結びに、本事業の実施に当たり、御協力いただいた関係の方々に厚く御礼申し上げます。

令和六年二月

警察庁交通局長 早川 智 之

△主催▽

警察庁

一般財団法人 全日本交通安全協会

公益財団法人 三井住友海上福祉財団

一般財団法人 日本交通安全教育普及協会

△後援▽

内閣府

文部科学省

△協賛▽

全国共済農業協同組合連合会（J A 共済連）

目次

《小学生の部》

最優秀作〔内閣総理大臣賞〕

班長の言葉 …………… 3

栃木県那須塩原市立埼玉小学校 四年 前野ちえり

優秀作〔国務大臣・国家公安委員会委員長賞〕

こうつう少年団とわたし …………… 5

東京都東京学芸大学附属小金井小学校 一年 中村 心美

自てん車 …………… 6

埼玉県新座市立野寺小学校 二年 神宮 由衣

交通安全とわたしのちかい …………… 7

愛知県碧南市立西端小学校 三年 山田 彩晴

自分の身は自分で守る …………… 9

熊本県玉名市立玉名町小学校 四年 村上まどか

家族をもう悲しませない …………… 10

香川県観音寺市立観音寺小学校 五年 福山 陽樹

大切な妹 …………… 12

徳島県徳島市昭和小学校 六年 伊原 里咲

優秀作〔文部科学大臣賞〕

きりんさんになる …………… 13

埼玉県宮代町立須賀小学校 一年 山本 幸奈

佳作〔警察庁交通局長賞〕

スピードをまもって …………… 14

鹿児島県学校法人池田学園池田小学校 一年 堀川 粹

ぼくがげんきにどうこうできるりゆう	一年	山中	颯真	15
茨城県下妻市立大宝小学校				
ヘルメットは、たからもの	二年	菊地	優莉	16
茨城県下妻市立下妻小学校				
大せつな やくそく	二年	倉持	陽	17
茨城県下妻市立下妻小学校				
わたしのじてん車	二年	高比良	葉織	18
兵庫県明石市立花園小学校				
交通安全のおじさんが教えてくれたこと	三年	小田	明依	19
鹿児島県学校法人池田学園池田小学校				
大切な交通ルール	三年	坂井	俊介	20
群馬県渋川市立橘北小学校				
妹とおつかい	三年	中島	翠彩	21
茨城県下妻市立下妻小学校				

ヘルメットで守る大事な命	四年	大島	咲優	22
東京都墨田区立立花吾孺の森小学校				
ヘルメットをかぶろう	四年	仲	庵志	23
山口県山口大学教育学部附属光小学校				
小さな油断、大きな悲しみ	五年	今幾多	信乃	24
大阪府大阪市立東粉浜小学校				
仲内家の交通ルール	五年	仲内	陸	25
茨城県八千代町立中結城小学校				
自転車に乗る前に思い出す教訓	五年	原田	一輝	27
福井県福井市東郷小学校				
「サイクリング」が教えてくれたこと	六年	飯原	愛理	28
茨城県下妻市立下妻小学校				
交通ルールは幸せのリレー	六年	佐藤	ひより	29
秋田県大仙市立内小友小学校				

事故の痛みを乗り越えて …………… 31

神奈川県横浜市立茅ヶ崎東小学校 六年 田中 紳慈

審査を終えて〔小学生の部〕 …………… 34

宮田美恵子

運転免許証返納大作戦 …………… 46

山口県学校法人萩光塩学院中学校 二年 明賀 洸士郎

命と安全のための輝き …………… 47

福岡県宗像市立自由ヶ丘中学校 三年 伊賀崎 望

《中学生の部》

最優秀作〔内閣総理大臣賞〕

交通安全家族会議 …………… 43

福島県郡山市立安積第二中学校 一年 安齋 真央

優秀作〔国務大臣・国家公安委員会委員長賞〕

弟の交通安全 …………… 45

岡山県倉敷市立真備東中学校 一年 仁沢 ひなた

優秀作〔文部科学大臣賞〕

かしんとゆだんが事故を生む …………… 49

東京都港区立六本木中学校 二年 大久保 美海

佳作〔警察庁交通局長賞〕

我が家の「交通安全」 …………… 51

香川県坂出市立東部中学校 一年 朝倉 茉央

みんなを守るために …………… 52

埼玉県越谷市立南中学校 一年 金子 由奈

やめませんか？歩きスマホ	54
静岡県静岡市立城内中学校	二年	安倍 夏希
「思い合う心」をもって	55
徳島県立城ノ内中等教育学校	二年	森 一翔
私と自転車	56
鹿児島県鹿児島大学教育学部附属中学校	三年	揚野 望咲
あつたらいいな「五つ目のマーク」	58
福島県いわき市立小名浜第二中学校	三年	遠藤 悠真
父とヘルメット	59
徳島県立城ノ内中等教育学校	三年	里吉 悠馬
審査を終えて〔中学生の部〕	62
鈴木 春男		

小学生の部



栃木県那須塩原市立埼玉小学校

四年 前野^{まえの} ちえり

班長の言葉

「危ないから、一列で歩いて。」

これは、今年度、登校班の班長になった兄の言葉です。私は毎日、片道二キロ以上の道のりを歩いて登校しています。今まで優しくかった兄が急に、並んで歩く事に対して、注意をするようになりました。私は、そのような兄をいつしか嫌だと感じるようになりました。

ある雨の日、かさをさしながら、いつものように友達と並んで歩いていました。兄の

「危ない。」

という言葉ではとしましたが、自転車にのった中学生とぶつかってしまいました。転んで、かさが曲がり、膝

から血が出ていました。

「助けられなくてごめんね。」

いつも怒ってばかりの兄が悲しい顔で言いました。その日の夜、兄と母が、私がかがをした事について話をしていました。兄は、

「注意をしても聞いてくれない。僕のせいだけではないけど、僕の力不足なのかもしれない。注意する事でみんなに嫌われて悲しいし、本当は班長なんかやりたくない。」

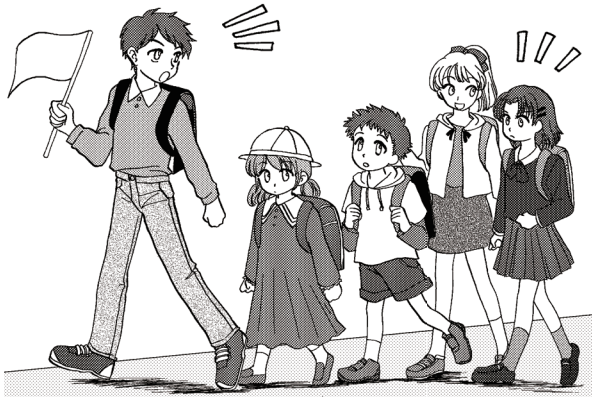
と言って泣いていました。兄がそんな風に言うなんて思いませんでした。その後、私も母と話をしました。まず、今回の事故の原因について考えました。私は、せまい道を二列で歩いていた事、友達との話に夢中になり、前をよく見ていなかった事がいけなかったと思います。そして母は、事故と安全は常に紙一重で、自動車との事故は、運転者側だけでなく、歩行者側の問題もあると言います。その意味について少し考えてみました。確かに、事故の要因は一つではありません。今回の事故も私の不注意に加えて、雨でかさをさしていたため、周りが見えにくくなっていた事、中学生側の不注意もあった

かもしれません。このように、少くくらい大丈夫だろうという思いから、その時の様々な状況が重なり、事故になるのだと思いました。

では、私にできる事は何なのか、自分なりに考えてみました。それは、自分自身の毎日の行動だと思っています。その中で、兄が私に嫌われても、私を守ろうとしていた思いに気づき、涙ができました。そして、目の前の楽しい事しか考えていなかった自分を恥ずかしく思いました。私は、みなに堂々と注意ができる兄の事をとてもほろしく思いました。次の日から私は、兄の命令にしたがいました。私が一列で歩くと、周りの友達も一列で歩くようになりました。

私は今回の事故から、自分自身が守らなければならない交通ルールについて、身をもって学びました。兄と登校できるのは後半です。これからは私が、低学年の子を安全に登校させる立場になります。兄の思いを私も引き継ぎ、みなが安全に登校できるように、まずは私自身が、登校中は、必ず一列になり、周りをしっかりと確認しながら歩く事から始めていこうと思います。そして私も、兄のように、相手を思い、注意ができる勇気ある人にな

りたいと思います。



優秀作

国務大臣・国家公安委員会委員長賞

東京都東京学芸大学附属小金井小学校

こうつつう少年団とわたし

一年 中村 心美
なかむら ここみ

「これ、入ってみない？」と、お母さんが市のこうほ
うを見せてくれました。「こうつつう少年団ってなに？」
とわたしがきくと「いろいろなかつどうをおして、こ
うつつうルールやこうつつうマナーをみにつけるところよ。
心美は4月から小学生でしょう？車のじこにあわないよ
うに、しっかりおべんきようしてきてね。」とお母さん
がいったので、ホームページも見せてもらったら、せい
ふくがかつこよかつたので入ることにきめました。
けいさつしよで入団しきました。団長さんが「が
んばってね。」と言って、ベレーぼうをかぶせてくれた
ので、とてもうれしかったです。

こうつつう少年団では、いろいろなことをおしえてくれ
ます。おうだんほ道をわたるとき、手をたくくあげるの
はなぜかというと、子どもはせがひくくて、車のうんて
ん手さんから見えにくいので、気づいてもらうためだと
して、びつくりしました。どうして手をあげるのか、
りゆうまでかんがえたことがなかったからです。だから、
わたしはおうだんほ道をわたるときは、ちゃんとうんて
ん手さんに気づいてもらえるように、おもいつきり手
をピンツとあげて、かつこよくわたります。うんてん手
さんがつこりわらうと、わたしもしあわせな気持ちに
なつて、につこりわらいます。

こうつつう少年団のかつどうは、べんきようだけではあ
りません。みんなでいちごがりに行つたり、こてきたい
のれんしゅうをしたり、白バイにのせてもらつたり、楽
しいことがいっぱいです。おまわりさんはとてもやさ
しいです。でも、けいさつ学校へ見学に行つたとき、あ
せをいっぱいかきながらきびしくんれんをしていたの
で、すぐかつこいいとおもいました。小学校からのか
えり道、お友だちとおしゃべりしたり、走りだしたくなつ
てしまふけれど、しんけんにくんれんしていたおまわり

さんをおもいだして「いけない、わたしはこうつう少年団だった。」とおもってがまんします。

こうつう少年団に入って、わたしはこうつうルールをよくまもるようになりました。わたしだけではありません。お父さんも「心美ががんばっているのだから、しっかりしなくちなな。」といって、自てん車よのヘルメットをかかってきました。「ヘルメットのひもは、あごの下でカチツというまではめるんだよ。」と、おしえてあげたら、カチツと音をならしてうれしそうなかおをしたので、二人で大わらいしました。

わたしはこうつう少年団が大すきです。もつとこうつうルールにくわしくなって、みんなのお手本になりたいです。そして、力をあわせて、じこのないまちをつくりたいです。

自てん車

夕ごはんをたべ終わったとき、

「ちよつとみんな聞いて。」

とおかあさんから言われました。そして、うでと太ももにできた大きなあざを見せてくれました。おかあさんは、自てん車でしごとに行っています。その日のかえりみち、小学生高学年くらいの男の子と自てん車でぶつかってころんでしまったとの話でした。見通しのわるいまがりかどで、とまってかくにんしていたらおかあさんの自てん車に、左がわからすごいきおいで自てん車がががつてきたそうです。あぶないっと思つたときには、よけきれずぶつかってしまったとのことでした。その男の子もころんでしまいました。二人とも大きなけがはしなかつたけれど、とてもいたかつたそうです。男の子もきつとけがしていると思いました。

おかあさんは、けがのことよりも、わたしたちの自て

ん車のり方についてすぐしんばいになったことを話してくれました。その男の子は、先に行ってしまった友だちにおいつきたくて、スピードを出していて、まがりかどでもかくにんせずにまがつてしまったのです。そういうことは、きつとわたしたちにもおこりそうだからとしんばいになったそうです。

「もしもそこにいたのがお年よりだったら、もしかしたらころんで大けがをしてみましたかもしれない。」とおかあさんは言いました。いのちにかかわる大へんなじこになっていたかもしれない。自分たちが、自分がかぞくがじこのかがいしやになってしまいかもしれないと、とてもこわくなりました。

自分も、みんなもけがをしないように、しんばいをかけないように、こう通ルールはしっかりとまもらないといけないとよくわかりました。

自てん車にのるときには、なにかあつてもあわてずに、まわりをかくにんしないといけないと思いました。まだ、一人で自てん車にのつて出かけることはしたことがないけれど、まがりかどやこうさ点では、一回とまつてかくにんするようにしています。自分はいじょうぶではな

く、自分もじこをおこしてしまうかもしれないところにとどめて行どうしていきます。

愛知県碧南市立西端小学校

三年 やまだ 山田 いろは 彩晴

交通安全とわたしのちかい

わたしが三年生になってうれしかったのは、大すきな自転車に自分一人で乗ってもよくなったことだ。

「これで一人でもそろばん教室に行けるよ。」うきうきしながらお父さんに話すと、お父さんはゆっくりと話し始めた。

「よく通る大きな道路のすみに、お花やおかしがおそなえしてあるのを知ってるかい。」

道路に物が置いてあるなんてふしぎだなと、ずっと前から気になっていた場所だ。お父さんの話を聞いて、そこは交通事故で子どもが死んでしまった場所だということを知った。

「彩晴は、死角って知ってるか。死角はとてもおそろしいんだぞ。」

お父さんはしんけんな顔で話を続けた。

「車の運転手からは、見えにくい角度がある。それが死角だ。自転車が入ってしまうと、運転手から気づかれずに、ひかれてしまうことがあるんだ。」

わたしは、事こで死んでしまった子のことを考えた。もつとたくさん遊んだり、勉強したりしたかっただろうな。そう思うと、知らない子のことだけど、とても悲しくなった。

わたしは、今までに交通事このしゅん間を見たことはない。でも、そのこわさは分かる。学校の交通安全教室で、人形が車にひかれてしまうところや、トラックにまきこまれた自転車ぐちゃぐちゃになる実えんを見たからだ。自転車には乗りたいけど、こわいなという気持ちが大きくなってしまった。もつと交通安全の勉強をすれば安心できるかもしれない。お母さんにそう言うと、近くのちゅうざい所におまわりさんがいることを教えてくれた。わたしは、話を聞きに行くことにした。

ちゅうざい所に行くのははじめてで、どきどきした。

でも、おまわりさんはやさしそうな人で、いろいろな話をしてくれた。

「今日も近くの町で交通事こがありました。」

ついとつ事こだそうだ。本当に、近くでも事こが起きているんだなとびつくりした。自転車に乗るときに大切なのは、ヘルメットをかぶることや、止まれのひょうしきの所でかならず止まることだという話も聞いた。それから、おまわりさんは、事こや事けんが起きた時だけじゃなくて、悲しい事こが起きないように、みんなに注意をよびかける活動も大切に行っているということも教えてくれた。

お父さんから聞いた交通事このあつた場所には、いつ通つてもおそなえがある。家族や友たちは、いつまでたつてもつらいんだな。わたしは、そこを通るたびに「命の大切さ」を考えるようになった。おまわりさんの話を聞いて、わたしたちの大切な命を守るために働いている人がいることも知ることができた。

自転車のハンドルは「命がけのハンドル」だ。大すきな自転車に乗るときには、交通ルールをしっかり守つて乗りたいと思つた。

熊本県玉名市立玉名町小学校

四年

村上 むらかみ

まどか

自分の身は自分で守る

私のお母さんは少し心配しようかもいけない。だって私のお母さんは私が小学2年生の初めごろまでの間、毎朝ずっと私と妹と一しよに歩いて学校へ行っていたからだ。私の家は学校から少しはなれていて歩いて20分位かかる。ようち園のころは車で送りむかえをしてもらっていて子どもだけでこんな長いきりを歩いた事がなかったから道をまちがえたらどうしようとか、車とぶつかったらどうしようとかそんな不安があったからお母さんが一しよに学校へ行ってくれるのが心強かったし、うれしかった。でも、小学校の学校生活にも少しずつなれてきた1年生の終りごろ他の子達は自分だけで学校へ行っているのに私はお母さんと一緒なのがちよびりはずかしくなってきた、ある日私は

「もうついてこなくて大丈夫だよ。」

とお母さんに言ってみた。するとお母さんは

「もう少し一しよに行ってもいいでしょ。ダメなの。」と聞いてきたので

「ダメじゃないけど。」

としか言えなかった。

それからもしばらく心配しようなお母さんと学校へ行く事になった。一しよに歩いて学校へ行っている時は、「信号を待つ時は前に出すぎない」「角を曲がる時は向こうから何も来ないかを立ち止まって大回りしないように曲がる」「見通しの悪い道をわたる時は手前で必ず止まって左右をかくにんしてわたる」「数m先の歩行者信号が青点めつしているもあわてて走って横だん歩道をわたろうとしない」中でも特におどりの練習のように何度も言われたのが私達よりはるかに高いへいの横を通りその先にある道をわたる時は横だん旗を持った手をめいいつばいまっすぐ高く上げてへいの上から旗が見えるように道をわたるといふものだ。これは反対がわからきた車にこちらから歩行者が歩いてくる事を気づいてもらうために考えたお母さんのアイデアだ。「もつと手を手を高く上げて」とくり返し言われたものだ。お母さんから何度も注意されていやだなあと思った事もあったけど毎日く

り返す事で次第にこの道ではこう注意するというのが頭で考えなくても自然に体が動くようになっていきお母さんにも注意される事が少なくなっていた。そんなもうすぐ夏休みというころとつぜん

「もう大丈夫だよね。」

とお母さんが言ったのでちよつとびっくりした。私はあらためてお母さんがどうしてそんなに心配するのかわかっていた。聞いてみた。

「よく事このニュースがあるでしょ。あなた達が事こにあったらと思うとじつとしていられなかったの。」とお母さんが言った。

たしかにテレビのニュースでは毎日のように事このニュースを見る。時には私と同じ年位の子が事こで亡くなったニュースを見たりするととてもこわくなる。朝、「いつてきます」と出かけたきり事こにあつてお母さんに会えなくなるなんてぜつ対にいやだ。お母さんも同じような事を言っていた。だからとても心配なんだと。

「家から一歩出たら自分の身は自分で守るしかない」

お母さんの口グセだ。お母さんは守ってあげたくても守ってあげられないのだと。

お母さんはいつも一しょにいられないから自分で身を守る方法を私達に身につけさせてくれたのだ。お母さんはずかしいなんて思つてごめんさい。

私は今小学4年生になっているけど今もお母さんに言われた事を思い浮かべ、自分の身は自分で守つて元気に学校に通っている。

毎日「ただいま」とげんかんから大きな声で言つて心配しようなお母さんを安心させている。

香川県観音寺市立観音寺小学校

五年

福山ふくやま

陽樹はるき

家族をもう悲しませない

ぼくは一年生のときに交通事故にあつた。道路をはさんだ向こう側の道にいたお姉ちゃんが「こつちにおいで。」とよんでいた。ぼくもお姉ちゃんの方に早く行きたくて、とつさに横だん歩道が無い道で手をあげて、それに気づいた手前の車が止まってくれた。だから安心して

て、ぼくは走ってわたった。でも向こう側の車は止まらずぼくに向かってきた。どこかのおじさんが大声で「あぶない！」とさげんでいた。ぼくはとっさによけようとしたけれど、体がこぼぼって動けなかった。ぼくは車にはねられて転がった。お姉ちゃんは先に歩いていたらけれど、しようとした音で何事かとふり返り、車の下で転がっているぼくを見て、事故に気付いたらしい。ぼくはこわくてあまりはつきりと覚えていないけれど、気づいたら周りに大人がいつぱいいて、お姉ちゃんが泣いていた。ランドセルがぼくを守ってくれた。警察からの知らせを聞いてかけ付けたお母さんも泣きそうだった。何が何だかわからなかった。ただただこわかった。

本当は両側の車が止まってくれているのを確認しないといけなかったのに、本当は横だん歩道のある位置まで歩いて行ってわたればよかったのに。

この事故から、家族で絶対に守らないといけない決まりごとができた。道をわたりたいときは、必ず「横だん歩道」でわたること、横だん歩道をわたるときも右と左をちゃんと確認してわたること。

当たり前前でだれでも知っている。保育園の時から

ら先生や家族に何度も何度も言われてきたことだけど、そうしないといけないとは思っていても、やりたいことで頭がいっぱいになるとできなくなる。でももう家族を悲しませたくない。

ぼくは今五年生になって一人で自転車に乗って友達の家遊びに行く。習い事にも図書館にも自転車で行く。でも自転車は車といっしょ。だからぼくが交通ルールを守らないと加害者になって人をきずつけることもある。

事故は、加害者もひ害者もその周りの家族も悲しませる。あのとき、ぼくにしようとした運転手さんも本当につらそうだった。連らくを受けた学校の先生たちもびつくりしたがぼくが無事なことに安心し、軽はずみな行動を注意した。ぼくは改めて、ぼくのしてしまった行動がこんなに色んな人にめいわくをかけていることに気づき、つらくなった。

どんなに急いでいても、急な飛び出し、点めつ信号中の横だんは絶対にやめようと心にちかった。

徳島県徳島市昭和小学校

六年 伊原 里咲

大切な妹

私のたった一人の妹は、来年四月にピカピカの小学校一年生だ。しつかり者の妹だけど道路を一人で歩いている姿を想像すると、何だかちよつとドキドキする。いつも必ず両親か私と手をつないで歩いているからだ。その妹が来年四月から一人で登校するのかと思うとやっぱり不安。

そこで、家族で話し合い、散歩がてらに通学路を含めた我が家の交通安全教室を開く事にした。時間は夜。夕ご飯の後、運動もかねて妹の為だけの交通安全教室開催。保育所でも交通安全教室があったらしく、自信満々の妹。でも、実際は危なっかしい所だらけ…。両親が言うには、私が入学前にも同じ事をして、心配でたまらなかつたそうだ。今の私はまるで、両親のような気持ちで妹を見守って心配でたまらない。

保育所や学校で開かれる安全教室と、実際の道路では危険度がまるで違う。

危険な場所は横断歩道だけではない。私が思う通学路での危険な場所、第三位は交通量が多い場所ばかりだということ。第二位は自転車や原付バイクも歩行者と同じ場所を通るので前だけでなく、後ろも注意が必要。第一位は、商店が多いので道路だけでなく、駐車場に出入りする為に急に曲がってくる車が非常に多いという所。

一つ一つ、確認して妹に教えているのだけど、夜と昼間の交通量が全く違うので慣れてきたら昼間にも教室を開催したり、もつと慣れてきたら私と二人きりで練習したり、色んなやり方でしつかりと教えていきたい。

ニュースで時々耳にする、悲しい事故…。そんなニュースが一つでも少なくなるように私たちが出来ること。大人の皆さんが出来ること。地域の皆さんで出来ること。色んな角度から物事を見ると、より安全で安心な生活が送れるようになるのではないだろうか。

今、私が出来ることが自分が感じた危険場所や、交通ルールを大切な妹にしつかりと教えていく事だ。

来年の四月、私は中学一年生。妹は小学校一年生。交通安全ルールに自信満々の二人で楽しく登校できるようになりますように。

優秀作

文部科学大臣賞

埼玉県宮代町立須賀小学校

一年

山本^{やまもと}

幸奈^{ゆきな}

きりんさんになる

わたしは、ようちえんのとき、いつも、おかあさんと、おとうとと、あるいてかよっていました。そのとき、おかあさんに、こうつうるうるをたくさんおしえてもらいました。

一ねんせいになって、あさ、がっこうにいくとき、しゅうごうばしよまで、ひとりであるいていくようになりました。さいしよは、とてもどきどきしていました。どきどきしていたことをおとうさんにいうと、

「それは、とってもいいこと。たいせつなことだよ。そのきもちは、おとなになってもずっとたいせつにもつていてね。」

と、いわれました。わたしは、まだ、ひとりであるく、ゆうきがないと、いわれるとおもっていたので、ほめられて、びっくりしました。

おかあさんは、とうこうするとき、まいあさ、かならず「いつてらっしゃい。ちゃんときりんさんになってね。」と、いいます。どうしてきりんさんになるかという、どうろががつながっているこうさてんでは、すこしてまえで、いちどとまって、くびを、きりんさんみたいに、ながくして、のぞいて、くるまがとまってくれるか、じてんしゃや、あるきのひとと、ぶつからないかどうかのあんぜんを、かくにんするからです。わたしは、「きりんさんになる」が、とてもわかりやすくて、きにいつています。こうさてんに、ちかいと、まがつてくるくるまに、ぶつかつてしまうことがあるので、ちよつとてまえでとまることが、たいせつなことです。

げこうはんで、いっしょにかえるおともだちは、いつも、さいしよは一れつで、あるいているけれど、だんだんおしゃべりがふえて、みまもりをしてくれるおとなのひとがいるばしよをすぎると、きゅうに、はしりだすのでわたしは、いつも

「あぶないよ、しんじやうよ。」

と、ちゆういするかかりです。そんなおともだちにも、わたしのうちのあいことば「きりんさんになる」を、おしえてあげようとおもいました。

佳作

警察庁交通局長賞

鹿児島県学校法人池田学園池田小学校

一年 堀川 粋

スピードをまもって

「パパ、スピードおとして！」

わたしのいえは、かごしましなからとおく、やまをこえたところにあります。いえにかえるときには、ほとんどしんごうもあります。そのため、ついさかみちになるとスピードがでてしまいます。

しょうがくせいになるまえ、ようちえんでこうつうあんぜんきようしつがありました。おうだんほどのわたりかたや、かんたんなひょうしきについてならいました。あかいまるのなかにすうじがかいてあるひょうしきが、くるまのせいげんそくです。わたしは、くるまのスピードがはやいなどおもったときには、ひょうしきをさがし

ます。そして、みつけたひょうしきのすうじと、くるまのスピードメーターをみくらべます。

「パパ、くるまはやいよーこは50キロだよ。」

とわたしがいうと、おとうさんはわらいながらスピードをゆっくりにしてくれます。そして、

「すいちゃんはきびしいなあ。スピードはまもらないどね。」

とえがおでいってくれます。そのあとやまみちをはしるときには、ひょうしきのせいげんそくと、スピードメーターをみくらべています。

「すいちゃんがみていてくれるから、あんぜんにはしれるね。」

といつてもらうと、わたしはうれしくなります。

なつやすみは、いえのうらにあるこうえんであそぶこともおおいです。こうえんにはいるまえにはおうだんほどうがあります。おうだんほどうをわたろうと、とまってまっていますのですが、スピードがはやいくるまは、あまりとまってくれません。わたしはとおりすぎるのをまっています。ゆっくりはしってくれるくるまは、とまってどうぞとえがおでおしえてくれます。わたしはゆっく

りとスピードをまもってはしるくるまがだいすきです。おとうさんも、

「せいげんそくとをまもったり、まわりがよくみえていることがたいせつだね。」
とおしえてくれました。

これからもくるまにのるときには、スピードメーターのみまもりをしていきたいです。そして、わたしもまわりをみて、えがおをおくれるひとになりたいです。

茨城県下妻市立大宝小学校

一年 山中 颯真

ぼくがげんきにとうこうできるりゆう

ぼくは、しょうがくせいになって、まいあさ、つうがくはんのみんなどがっこうまであるいていきます。じぶんであるくようになって、いえのまえのどうろは、スピードをだすくるまがおおいのきがつきました。パパもママもぼくがいきおいよくでようとすると、「あぶないー」

「きをつけて!!」とちゅういしてくれます。そんなとき
はぼくもあぶないからきをつけてようとおもいます。

がつこうまでのつうがくろ、たくさんのひとにであ
います。しゅうごうばしよでいつもおそうじをしているお
じいちゃん。つぎは、りようしつのおばあちゃん。

「おはよう。きょうもあいさつえらいね」

「きをつけていくんだよ!」

あるいてるとちゅうは、はんちようさんがぼくたち
のあるくスピードにあわせてくれたり、くるまにきづい
ていないと「あぶないよ!」とこえをかけてくれます。
がつこうのちかくまでくると、はたどうばんのかたがた
がおうだんぼどうにたつて、ぼくたちがわたるのをみま
もってくれます。そして、がつこうまえではせんせい
がまつていてくれます。

ぼくががつこうにぶじにたどりつくまでのやく一キロ
のみちのり。ぼくはたくさんのひとにみまもられている
んだなあとおもいました。ぼくがえがおでげんきにかよ
えるのも、みなさんのおかげです。いつもありがとうございます。
ざいます。

これからありがとうございますのきもちをわすれずに、じゅう

ぶんにあんぜんにきをつけていきたいとおもいます。ひ
きつづき、みまもりをよろしくおねがいします。ぼくも
げんきなあいさつでおかえししていきます。

茨城県下妻市立下妻小学校

二年 菊地 優莉

ヘルメットは、たからもの

かぞくでりようこうに行つていたときのことだった。赤
しんごうでとまつたしゅんかん

「ドーン」

と、とても大きな音がした。わたしたちかぞくもみんな
で

「キヤー」

と、さけんだ。まわりを見ると、きずだらけのバイクと、
ガラスがわれたタクシーが見えた。その近くには、よこ
たわつた男の人のすがたが見えた。わたしのおとうさん
は、いそいでたおれている男の人のもとへ行つた。わた

しは、車でまっているあいだに

「バイクのうんでんしゅさんは、だいじょうぶかな？」
と、なんどもおかあさんに聞いた。

しばらくして、きゆうきゆう車がきて、おとうさんが
もどってきた。おとうさんは、

「だいじょうぶだ。よびかけたらうなずいてくれた。
ヘルメットのおかげでたすかった。」

と、言った。わたしは、バイクのうんでんしゅさんがぶ
じだったことがうれしくて、おとうさんのことばを聞い
たとたん、なみだが出てきた。わたしは、

「ヘルメットつてすごくだいじなものなんだね。」

と、言いながらなみだがとまらなかつた。

わたしは、二年生なのでまだじてん車で、どうろは、
はしれないけれどにわか公園でじてん車にのることがあ
る。このじこを近くで見て、じてん車にのる前には、か
ならずヘルメットをかぶろうと、かぞくでやくそくをし
た。

人のいのちをまもってくれるヘルメット。わたしのい
のちをまもってくれるヘルメット。そんなヘルメットは、
わたしの大切なたからものだ。

茨城県下妻市立下妻小学校

二年 倉持 陽くらもち ひなた

大せつな やくそく

「車はきゆうに止まれないんだよ。歩く人も、車をう
んでんする人も、こうつうルールをまもろうね。」

ぼくは、お父さんにこう言われています。

ぼくが、いえのそとで、サッカーをしてあそんでいた
時に、ボールがどうろにころがつていつてしまったこと
がありました。ぼくが、あわててボールをとりに行こう
としたときに、お父さんが、

「あぶないー止まってー！」

と、大きなこえで言いました。ぼくは、とてもびっくり
しました。

それから、ぼくは、かぞくと、どうろの歩き方やこう
つうルールについて、話をしました。そして、やくそく
を二つしました。

一つ目は、「ピタッと止まって右、左」です。ぼくは、
そとであそぶときはもちろん、まがりかどでは、車がき

わたしのじてん車

ていないか、止まってたしかめます。おうだんほどうでは、しんごうが青になっても、かならず右、左を見てからわたります。車のはしつてくるかもしれないからです。二つ目は、「よそ見をしない」です。ぼくは、歩いている時に、友だちや、犬や虫を見つけると、気になって、よこや、うしろを、きよろきよろ見てしまいます。よそ見をして歩いていると、きけんなことに気がつくのがおそくなつてしまいます。まわりに、きけんなものがないか、車はきていないか、気にしながら歩きたいです。

このやくそくは、ぼくだけではなく、かぞくみんなできめた、たいせつなやくそくです。お父さんやお母さんが車をうんでんするときにも、おねえちゃんやおにいちゃんかじてん車にのるときにも、みんなでもまろうとやくそくしています。

ぼくは、歩く人も、じてん車にのる人も、車をうんでんする人も、一人一人がこうつうルールをまもっていけば、いやな思いや、かなしい気もちになる人がすくなくなると思います。ぼくは、かぞくみんなでやくそくしたことをまもって、元気に、あんげんに生かすつていきます。

わたしは一年生のとき、少し大きいじてん車をかってもらいました。色はむらさきです。かわいい色できれいだったので、じぶんでえらんでかってもらったおきにいます。

ようちえんのときは、おかあさんのじてん車のうしろにのつていましたが、大きくなつてのれなくなりました。だから、新しいじてん車に、じぶんでのつて、おかあさんといっしょにはしるになりました。

じぶんでじてん車にのると、あるいているときや、おかあさんのうしろにのつているときよりも、交通安全を心がけないといけなことがたくさんあることに気がつきました。

じてん車にのるとき、気をつけようと思ったことが三つあります。

一つ目は、スピードを出しすぎないことです。スピー

ドを出しすぎて、きゅうに止まれなくて車や人にぶつかったら大へんだからです。

二つ目は、まがり角やこうさ点でブレーキをかけ、右をよくかくにんすることです。ブレーキをかけて、ちゃんとかくにんしないと、車をうんでんしてる人にめいわくになったり、じ分もじこをおこしたりするかもしれないからです。

三つ目は、じてん車でどうろをはしっているときは、あるいている人をゆうせんすることです。あるいている人に気をつけないと、ぶつかったりしてけがをさせたりするかもしれません。

じぶんでのると、たくさん気をつけないといけないことがあつてたいへんだと思います。でも、交通ルールをまもつて、じこやけがに気をつけて、お気にいりのじてん車でたくさんおでかけしたいです。

鹿児島県学校法人池田学園池田小学校

三年 小田 明依

交通安全のおじさんが教えてくれたこと

「おはようございます。今日も一日がんばってくださいね。」

私が学校に行くとき中の横だん歩道には、毎朝交通安全のおじさんが立っています。中学二年生のお姉ちゃんが小学校一年生の時から子どもたちの安全を見守ってくれているそうです。おじさんは、雨の日はレインコートを着て、夏の暑い日も、台風が近づいている時も、雪の日もいつもはたを持って立っています。そして、車の人はたをふつて、私たちが安全に横だん歩道をわたれるように守ってくれます。大雨の時に、空がぐらくてこわかった時にも、おじさんが立っていて、

「おはようございます。雨がほしいからけがのないように気をつけて行ってね。」

と話しかけてくれて、こわさがなくなりました。おじさんが安全を見守ってくれるおかげで、私たちは安心して

学校に行けます。

休みの日、お母さんと車で出かけた時、信号がない横
だん歩道に、ようち園生くらいの男の子とお母さんが
立っていました。男の子は、右手を高く上げていました。
私のお母さんは少しはなれた所で車を止めて、

「お先にどうぞ。」

と言って手で合図をしました。男の子のお母さんが頭を
下げて、私のお母さんも頭を下げて、二人ともにっこり
あいさつをしていました。

「ほこうしゃゆうせん。男の子が手を上げていたから、
すぐに車を止めることが出来たね。手を上げてくれてよ
かった。」

とお母さんが言いました。それから交通安全について話
し合って、車の人に気づいてもらえるように横だん歩道
をわたる時には、手を上げてまつことや手を上げてわた
ることが大切だとさいかくにんしました。

交通安全のおじさんが、私たちの安全を守ってくれる
ことに感謝して、私に出来ることは安全に気をつけて、
横だん歩道では車の人に気づいてもらえるように、手を
上げてわたることを守っていききたいです。そしてありが

とうの感謝のおじぎもしようと思います。

群馬県渋川市立橋北小学校

三年 坂井 俊介

大切な交通ルール

ぼくは交通安全について家族にインタビュしてみました。
そうしたら、こんなことができました。

おじいさんは、横だん歩道は左右をちゃんとかくにん
することだそうです。

おばあさんは、スピードをださないようにせいげんそ
くどをまもること。

お母さんは、車を運んでいる時は、歩行しゃをか
ならずかくにんすることを心がけているそうです。

お父さんは、車を運でんする時は、そくどをださず、
車間きよりをたもつこと。ながら運でんは、ぜったいし
ないこと。月曜日の朝と金曜日の夕方はスピードを出す
人がたくさんいるので、前後かくにんに気をつけている

茨城県下妻市立下妻小学校

三年 なかじま 中島 すい 翠彩

妹とおつかい

わたしは、妹と二人で、家のちかくの店によくおつかいに行きます。妹は、まだ三才なので、交通あんぜんのことをあまりよくわかっていません。いっしょに歩くときに、わたしが気をつけていることがあります。

まず、歩道を歩くときには、車が通っている方をわたしが歩いて、妹をまもるようにしています。

前や後ろから、自てん車が来たときには、妹をはじっこによせて、いっしょに止まって、自てん車が通りすぎしてから歩きはじめます。

とちゆうに、たて物がじゃまで、車がきているかよく見えない所があります。しん号もありません。そこをわたるときは、妹を少し手前でまたせて、わたしが一人です。車が来ていないかよくかくにんしてから、妹と手をつないでわたります。

車がたくさん通る道の横だん歩道をわたるときには、

こと。小学生の登校の時は、いつでも止まれるスピードで通りぬけることだそうです。

そして、ぼくが気をつけていることは、横だん歩道をわたる時は、大きく手をのびしてあげることです。

弟にも聞きたかったけれど、弟はまだしゃべることができないので聞けませんでした。来年になったら、弟がたくさんしゃべるようになって、インタビューができたらいなと思います。

今回ぼくは、家族にインタビューをしてみても、いろいろなことを考えているんだなあと思いました。

交通安全は、人がけがをしなくてすむようにルールをまもることが大切だと思います。

もしぼくが、学校に行く途中に事こにあつたら、ぼくは死んでしまうかもしれません。そうなると、ぼくは悲しいし家族も悲しむと思います。だれも悲しい思いをしないようにルールをまもることが大事だし、ルールはまもるためにあるものです。みんな一人一人が交通安全を心がければ、悲しい思いをすることがなくなると思えます。

東京都墨田区立立花吾嬬の森小学校

四年 おおしま 大島 ささゆ 咲優

ヘルメットで守る大事な命

妹が道ろにとびださないように手をつないでしん号が青になるのをまちます。しん号が青になっても、まがつてくる車がいるかもしれないので、車がこないかきちんと見てからわたるようになっていきます。これはいつもお母さんからよくちゅういするように言われていることです。まがつてきた車のうんてん手さんが、「どうぞ。」と合図をしてくれた時は、べこりとおじぎをして手をあげてわたります。そうすると、妹もわたしのまねをしてべこりとおじぎをします。

お店についてからも、ちゅう車場は、車がたくさん出入りしているので、妹と手をつないで車に気をつけながらお店に入ります。

わたしが、お母さんのうんてんする車にのっていると、じこにあっている車を見かけることがあります。その車じこの相手が、もし自分や妹だったら、きつと大けがをしたり、しんでしまうかもしれない。そうなたらいやなので、これからも気をつけておつかいに行こうと思えます。

私は小さいころからお母さんの自転車に乗る時も、必ずヘルメットをかぶっていました。『頭は一番大切』と言われていたので、一人で自転車に乗れるようになってからもかならずヘルメットをかぶっています。

自転車教室や交通少年団でも自転車の乗り方や交通ルール、ヘルメットの大切さを教えてもらいました。

ヘルメットをかぶっている時とかぶっていない時の事でケガやなくなってしまう人の人数がどれだけ違うのかが気になり調べてみました。すると、死亡つが2倍、3倍とちがうことがわかりました。大切な人を事故でなくしてしまうのはとても悲しい事なので、ヘルメットで守れる人をふやしていきたいと思いました。

交通安全週間で交通少年団として交通安全のいろいろな活動をするときには、そんな気持ちをこめて、

「自転車や車に気をつけてください。」「自転車に乗る

時はヘルメットをかぶってください。」「交通ルールを守ってください。」と町の人達に笑顔で元気よく伝えていきます。一生けん命に伝えて、

「ありがとう気をつけるね。」

と言ってもらえた時はとてもうれしい気持ちになりました。

私の学校の校長先生は

「先生もヘルメットを買いました。みなさんも自転車に乗る時はしっかりとヘルメットをかぶってください。」と全校朝会でヘルメットを見せてくれました。

今はけい察官以外の大人はあまりヘルメットをかぶっていませんが、大人もかぶる人がふえてほしいと思います。

交通少年団のご笛たいの練習でけい察署に行った時に、ぼう子に見えるおしゃれなヘルメットがかざってありました。

「ママもこれならヘルメットっぽく見えなくていいね。」

と私が言うと

「これはいいね。」

とお母さんが言ってくれました。

まずは身近な家族や友達、そして交通少年団での様々な活動を通して一人でも多くの人にヘルメットの大切さを伝えていき、守れる命をふやしていきたいです。

山口県山口大学教育学部附属光小学校

四年 なか仲 あんじ庵志

ヘルメットをかぶろう

ぼくは、母と自転車ですーパーへ行くとき、必ずヘルメットをかぶる。母はヘルメットをかぶらないで乗っている。これは、本当はいけないこと。中学生の姉は、通学や部活に行くとき、必ずヘルメットをかぶっている。これは、良いこと。ぼくのおばあちゃんは、ヘルメットをかぶらないで乗るのは、わるいことをしているようにいやだとよく言う。ぼくは、おばあちゃんと言うことは正しいと思う。

今年の四月一日から道路交通法の改正によって、ヘル

メットの着用が努力ぎむ化された。でも、今までかぶっていたいなかった大人は、ヘルメットをもっていなかったり、かぶるのがめんどろだったりするみたいだ。

ヘルメットは、ぜったいにひつようだと思ふ。なぜなら、事故にあつたり、ころんだり、転落したりしたとき、ヘルメットが頭を守ってくれる。命も助かる。そのことを考えたらみんなヘルメットをかぶるべきだと思ふ。

最近、ヘルメットをかぶっている大人をよく見かけるようになった。ヘルメットの形や色もさまざま。好きなヘルメットを選んで、車に乗ったらシートベルトをするのと同じように、必ずヘルメットをかぶる習かんを身につけてほしい。自分の大切な命のために。ぼくも母に注意したい。

ぼくが自転車で出かけようとすると、おばあちゃんが、「歩いているお年よりに気をつけてね。」とよく言う。

「なんで。」
とぼくが聞くよ、

「年をとると、歩いていてもふらつくことがよくあるんよ。それで、転んでこっせつしたら大変よ。だから気

をつけて。」

と、答えてくれた。

それからは、お年よりに出会うよ、自転車からおりてそこを通りすぎるまで歩くよにしている。ちよつとしたことだけど、一つの大切な命につながるよことだと思ふ。ぼくも気をつけているよ、歩くお年よにも注意してほしい。そして、元気でけがなく生活してほしい。

大阪府大阪市立東粉浜小学校

五年 いま幾多 た 信乃 しの

小さな油断、大きな悲しみ

私の母は車の運転ができない。

友達が「家族全員でドライブに行ったんだ。」と話しているよ、いいなあ、楽しそうだなあ、とうらやましく思ふ。ある日、気持ちちが爆発し、

「なんで、みんなのお母さんは車を運転できるよ、私のお母さんは車を運転できないの!?!」

と母に言ってしまった。すると母は少し悲しそうな顔になった。

「ひいおじいちゃんが交通事故で亡くなったからだよ。」

母が二十才の時、母のおじいちゃん、つまり私のひいおじいちゃんが不慮の事故で亡くなっていったのだ。静岡に住んでいたひいおじいちゃんはその日、ひいおばあちゃんとその友達を乗せてゲートボール場に向かって車を運転していた。目的地まであと少しという時曲がり角から突如大きな車が迫って来た。ひいおじいちゃんの車はよけきれず大破。ひいおばあちゃんだけが生き残った。それ以来、ひいおばあちゃんは何かを楽しむことができなくなつたのだ。ひいおばあちゃんだけでなく、母も心に深い傷を負い、それは未だ完全にはいえていない。

この話を聞いた私は、おどろいて言葉が出なかつた。母にこんな過去があつたなんて。交通事故によつてたくさんの人が悲しむ様子を目の当たりにした母はその後、車の免許を取ろうとしなかつた。私は

「ひどいことを言つてごめんなさい。そんな理由があるなんて思つてもいなくて。」

とあやまり、このような悲しい事故をなくすためにはどうすればよいか考えた。車を運転する人に限らずすべての人が気をつけないといけない。

私はよく自転車に乗つて図書館に行く。そのルートには曲がり角も信号もたくさんある。信号では左右のかくにんをしっかりと見て、曲がり角ではスピードを落とすとして慎重に曲がる。このような小さなことを守っていくのが大切なのだと心にちかつた。ほんの小さな油断でも、とても大きな悲しみを生むのだから。

茨城県八千代町立中結城小学校

五年 仲内 陸

仲内家の交通ルール

ぼくの家の交通ルールは「きよろきよろすること」です。授業中にこれをしてしまうと、もちろん先生にしかられるのですが、この「きよろきよろ」が交通事故を防いでくれたのです。

ぼくは通学班で登下校していて、一ヶ所だけ大きな道路を横断します。もちろん、信号のある横断歩道をわたるのですが、青信号になった横断歩道に車がつつこんできたことがあるのです。朝はまぶしかったり、暑かったり、寒かったり、下を向いて歩きたくありません。でも、ぼくは小さなころから車好きで、登校中もきよろきよと走っている車を見えています。この時は

「あれ？あの車止まるかな？」
と不安になり

「○○くんあぶない！」

とさげびました。一番前を歩いていた班長さんは、つつこんできた車の手前で立ち止まり、ぶつからずにすみましました。事故にならなくて良かったとほっとしたけれど、ぼくの心ぞうはドキドキしていました。

登下校中にあぶないことがあつた時や、交通事故のニュースを見た時、ぼくは家族と話します。そして、どうすれば事故が起きなかつたか、自分だつたらどうしていただろうと考えます。

ある時、お母さんのパート先に軽自動車がつっこむ事故がありました。原因は運転していた人のブレーキとア

クセルのふみまちがいでした。お店のガラスは大きくわかれて、商品のならんでいたたなには、ガラスの破へんが飛び散つて商品は捨てることになったそうです。

「けが人が出なくて良かった。ほかのお客さんがまきこまれたらと思うとぞつとした。」
とお母さんは言いました。

ぼくは、テレビで見えるような事故が身近で起きていることにおどろきました。自分が気をつけていても、とつぜん事故にあつてしまうこともあるんだとおそろしくなりました。

交通ルールのお話をする度に、お父さんとお母さんに言われることがあります。

「外に出ている時はきよろきよろしていいよ。自分の身は自分で守ること。」

ほとんどの人は交通ルールを守っているけれど、残念なことに、信号を守らない、よそ見をする、お酒を飲んで運転する、ほかにも交通ルールを守らない人がゼロになることはないと思います。だからこそ、ぼくはこれからも「きよろきよすること」を続けて、自分の身を守りたいです。

福井県福井市東郷小学校

五年

原田

一輝

自転車に乗る前に思い出す教訓

二〇二三年三月八日、僕は自転車で事故をおこしてしまつた。忘れられないあの日、友達の家へ遊びに行つた帰り道、帰る時間を過ぎてしまい、ぼくはとても急いでいた。自転車をとぼして走つていた時、目の前の歩道を横切ろうとしているおばあさんが見えた。ぼくは頭の中で「行ける」と思い、おばあさんの横を通りすぎようとした。その時「いたたた」と声が聞こえた。自転車のハンドルがおばあさんの体にあたつてしまつたのだ。僕は頭の中が真っ白になつた。手がふるえた。座りこむおばあさんに近づいて行き、「大丈夫ですか？ごめんなさい。立てますか？」と聞いたのを覚えている。おばあさんは、足に人工的に作つた骨が入っていて、なかなか立つことが出来なかつた。ぼくは携帯電話を借りて、おばあさんの家族とぼくのお父さんに電話をかけた。その後しばらくして、警察の人が来た。ぼくはたいほされるの

かと思ひ、ドキドキが止まらなかつた。でも警察官は「何があつたの？」と優しく聞いてくれた。とてもホツとした。「しっかり話してくれてありがとう」と言ってくれた。その後、おばあさんは、救急車に乗つて病院へ行つてしまつた。お父さんが遠くから歩いてきてくれる姿を見たとき、ぼくは涙が出そうになつた。緊張して立っていた僕の足から力がフニャフニャとぬけてゆくようだつた。

「ごめんなさい。」

「逃げずに残つてえらかつたよ。」

まだ周りの人がたくさんいたので、泣くのをがまんした。

今回ぼくは実際に事故をおこして、二度とこんな経験はしたくないと思つた。あの時なぜ「行ける」と軽く考えてしまつたのだろう。ちゃんと止まっていたら、おばあさんもケガをしなくてすんだし、家族に怒られることも、ぼくがその後しばらく自転車禁止になることもなかったはずだ。

今回のことで自転車の恐さもよく分かつた。事故の後、自転車事故で死んでしまう人がいることも知つた。それくらい危ない乗り物だ。だから今後自転車に乗る時は、

すっかり周りの状況を見て、交差点では止まり、人の近くを通る時はゆっくり走ることなどのルールを家族で話し合った。

おばあさんは今もリハビリをしているらしい。うまく歩けるようになることを祈る。

ぼくは今日も自転車に乗る。あの日を忘れない。これからもそれはぼくの教訓として心に残り続けるだろう。

茨城県下妻市立下妻小学校

六年 飯原 愛理

「サイクリング」が教えてくれたこと

今年の春、栃木県真岡市の井頭公園に家族で遊びに行きました。到着後、園内散歩用に自転車を貸し出していることを知った母が、

「せっかくだから、みんなでサイクリングを楽しみながら桜の花を見よう！」

と言い出したため、何年も自転車に乗っていない父母や祖父母、たまには乗る私の五人全員が自転車を借りることになりました。

ヘルメットをすっかりかぶり、コースをスタートしました。美しい緑の木々や、咲きほこる桜の花を見ながらのサイクリングはとても楽しくて、家族みんなで

「気持ちいいね」

「最高だね」

などと言い合いながら、のんびりと自転車をこぎました。父、母、祖父、祖母、私の順で一列になって走りました。私が一番後ろを走ることにしたのは、八十代の祖父、七十代の祖母が、私や父母といっしょに走ってつかれたりしないか後ろから見守ろうと思ったからです。

みんなを見ながら走っていると、気になることがあります。父母は問題ありませんが祖父母は道路に転がる石や張り出した木の根など、障害物への反応がとてもおそいのです。また、後ろから追い抜こうとする人たちにもなかなか気付かず、私が

「危ないよ、後ろから自転車来るよ」

と伝えても、急には方向を変えられず、もう少しでぶつ

かりそうになったりするなど、ヒヤリとする場面が何度かありました。いずれも相手がよけてくれたため助かりましたが、私はこのままではいけないと思いました。

「みんな、いったん止まってー」

私の呼びかけに、みんなは自転車を止めてふり返りました。私は、さまざまなことに対する祖父父母の反応がおそいために「ヒヤリ・ハット」が数回あったことなどを伝えました。

「このままでは危ないと思う。私が一番前になって、じいちゃん、お父さん、ばあちゃん、お母さんの順番で走ろう。何かあったら、私とお母さんが大声で伝えよう。」と提案すると、父母が「それは良いね」とほめてくれました。私の提案を生かしたその後のサイクリングはとても安全で、ヒヤリとする場面は一度もないままみんな笑顔でゴールすることができました。祖父母に「ありがとう」と言ってもらえてうれしかったです。

祖父母のようにお年寄りの反応がおそくなるのは、耳のおとろえなどもあり仕方がないことだと思います。徒歩や自転車、自動車などお年寄りが移動する時には、周りの人たちがしっかり気を配ることが大切なのだとい

ことを、今回のサイクリングは教えてくれました。人にやさしくする気持ちから、みんなが安全・安心に暮らせる社会を実現できるといいなと思います。

秋田県大仙市立内小友小学校

六年 佐藤^{さとう} ひより

交通ルールは幸せのリレー

「行つてらっしゃい。今日も気をつけて。」

私の朝は、やさしくてあたたかな「行つてらっしゃい」のリレーが始まります。六年生の私は、九人の登校班の班長です。玄関での家族からの「行つてらっしゃい」をスタートに、みんなの家に寄るたび、お家の方からも「行つてらっしゃい」「気をつけてね」の声をかけられる朝を送っています。

登校途中に、歩行者からも運転手からも少し見えづらい交差点があります。そこは登校班の小学生も、また仕事に向かう車も通る道なので危険な場所です。でも、こ

ここにはどんな天気の日でも交通安全の旗を持ち、私たちを見守ってくれる地域の方がいるのです。私たちのもと、そして止まってくれた運転手にもやさしい笑顔を送ってくれます。おかげでこの交差点を通る私たちは、毎日安全に登校できています。今では高校生になった兄も

「ぼくたちもずっと見守ってもらったよ。朝は忙しいはずなのに、本当にありがたいね。」

と言っていました。心から、見守り続けてくれてありがたいの思いがあふれてきます。

今年に登校班に一年生が三人増えた分、通いなれた道でも、四月の私はドキドキ緊張していました。でも、あの交差点でいつもの地域の方が、

「ひよりちゃん、いよいよ六年生になったね。人数は増えたけど大丈夫、がんばってね。」

と声をかけてくれました。大きな返事をしながら、おかげで班長としての思いを新たにすることができました。ふと後ろをふり返ると、黄色いぼうしと黄色いランドセルカバーをつけて、かわいい一年生がいつしようけんめい歩いています。よし、今年も安全に登校するぞ、と願

いを強く持つことができた私です。

ゴールである小学校が近づくと、そこには横断歩道があります。この場所にはいつも、笑顔の校長先生とボランティアの方が待っていてくれます。校長先生たちとあいさつを交わすと、今日も登校班のみんなと安全に到着できた、とほっとした気持ちになります。

「ルールはめんどくさいことや、きゆうくつなことではないんだよ。ルールを守ることはルールに守られること。交通安全は悲しむ人を減らし、うれしい未来を創るからね。」

これは、交通課に長く勤務していた元警察官の祖父がよく話すことです。祖父と話しながら、私自身、交通ルールを守ることや実践することを当たり前に思える六年生になっていることに気づき、自分をほこらしく感じました。これはきつと私の周りの大人が、交通安全のルールを当たり前に守る姿を見せてくれる人たちだったからだと思います。私の小学校六年間は、多くの大人たちの交通安全を願うやさしさ、あたたかさのラリーによって作られてきたのだと思うと、うれしくてたまらない気持ちでいっぱいです。

「行ってらっしゃい」「気をつけて」のバトンを受け取って、これからも私たちの一日を安全に作っていききたいと思えます。

神奈川県横浜市立茅ヶ崎東小学校

六年 田中 紳慈

事故の痛みを乗りこえて

ドンッ！ 右肩に固いものが突然、ぶつかり、痛みが走りました。六年生になったばかりの四月、道路を渡っていた下校途中、僕はワゴン車と接触する事故にあいました。現場は、自宅のすぐ近く、普段は車がほとんど通らない、静かな住宅街の中、横断歩道のない、通学路に指定されている場所でした。

ただ、そこは電柱と生い茂る街路樹のせいで見通しが悪く、僕はいつものように、歩道から車道に降り車が来ないか確認していたところ、ワゴン車に接触してしまっただけです。

幸い、肩が少し痛むだけだったので、僕は急いで家に帰り、両親に「目の前の道路で車にぶつかった」ことを話しました。急いで、両親と現場に戻った僕に、運転手さんは「そちらが飛び出してきた」と言いました。

その言葉を聞き、僕は、自分が不注意だったのかもしれないと自分を責めはじめました。

数分後、サイレンを鳴らしたパトカーが到着しました。僕は「いよいよ、大ごとになってしまった。もつと気をつけていれば」とさらに暗い気持ちになり、胸が痛くなりました。

しかし、警察官の方は「大変だったね。けがは大丈夫かな」と優しく話しかけてくれました。そして、手ぎわよく運転手の人からも話を聞き、両親と僕に「今は痛みがなくても、必ず医師の診察を受けてくださいね」と言いながら、ほほえみかけてくれました。

続いて、かけ付けた校長先生も、お見舞いの言葉をかけてくれただけでなく、現場の街路樹の様子を詳しく確認してくださいました。

その後、運転手さんの勤めている会社からも「前方不注意でした」との丁寧な謝罪があり、自分を責め続けて

いた僕の胸の痛みは少しずつ和らいでいきました。

そして、夏休み前。学校から依頼を受けた区の土木事務所の人が現場の街路樹を大きく刈り込み、見通しがとてもよくなりました。

事故にあったばかりの頃は、肩の痛みだけでなく、自分を責める気持ちから来る心の痛みに悩まされ、眠れない日もありました。

しかし、警察官の方、学校の先生方、お医者さん、両親が、優しい言葉をかけてくれ、また、街路樹が刈り込まれたのを見て、自分を責める気持ちは、だんだんお世話になった方々への感謝へと変わっていききました。

僕は今回、交通事故の被害者となり、被害者の痛みには、けがから来る体の痛みだけでなく、被害にあった自分を責めてしまう、心の痛みもあることを知りました。ただ、その痛みでさえ、色々な人の真心に触れることで、やわらげられることも、同時に知りました。

事故のことは、二度と思い出したくないけれど、今回お世話になった方々への感謝は、一生忘れません。

そして、お世話になった方々への恩返しとして、自分の体験を同級生や下級生に伝え、事故にあわないよう注意を

呼び掛けるとともに、不幸にも事故にあってしまったときには、周囲の人に助けを求めることの大切さを、多くの友だちに分かってもらえるよう努めたいと思います。

審査を終えて

NPO 法人日本こどもの安全教育総合研究所理事長 宮田 美恵子

小学生の部

わが国の交通事故発生状況は、統計開始の昭和二十三年から令和四年現在まで、事故件数では平成十六年の九十五万二千七百二十件、死亡事故では昭和四十五年の一万五千八百一件をピークとして、大きく減少しています。年齢層別の死者数推移では、平成二十四年から令和四年現在まで、小学生に相当する五〜九歳、十〜十四歳についても、一定数を推移しながらも減少傾向を見せています。事故を一件でも減らすためには、引き続きの環境整備や教育などが必要です。

地域では、交通安全のための母の会やボランティア、推進員、指導員の方々が中心となって、通学路などで子どもたちを見守ってくださっています。

今年も作文の中にボランティアの方々とのエピソードが多数登場しました。見守る方々とのふれあいは、事故を防止するだけでなく、子どもたちに自他の命の大切さや、交通ルールと事故防止活動の重要性を意識づけ、見守る人たちへの感謝の心などを育んでいます。

交通ルールについては、令和五年四月一日以降、すべての自転車利用者のヘルメット着用が努力義務となりました。事故を防止するには、交通安全について話し合う、ルールを確認する、家族の約束を決めるなど、各家庭での取り組みが大切です。

大人が交通安全の話をすることで、子どもは子どもなりに考え、疑問を持ち、理由を知って理解を深めるこ

とができるのです。

交通安全について考える経験は、子ども自身を生涯守る宝となります。交通安全ファミリー作文は、経験を自分事として捉え、考えて書くプロセスを通じて、子どもたちの心と体に交通安全が定着するきっかけとなるでしょう。交通安全ファミリー作文コンクールは、開始以来四十五年となりました。参加してくださる子どもたちが毎年大勢いるのはうれしいことです。子どもたちの交通安全教育に対する多くの方のご理解とご協力のおかげで、今年は、小学生の部は全国から千百八十五点の応募がありました。予備審査を経て、八人の審査員による本審査を行った結果、次の各賞を決定いたしました。

最優秀作（内閣総理大臣賞）小学生の全体から一作品

優秀作（国務大臣・国家公安委員会委員長賞）小学生各学年から一作品以内

佳作（警察庁交通局長賞）小学生各学年から一作品以内

表彰作品および講評は次の通りです。

最優秀作（内閣総理大臣賞）は、栃木県の四年生 前野ちえりさんの「班長の言葉」が受賞しました。

この作品は、登校班の班長になった兄と筆者の気付きがテーマです。筆者は登校班の班長である兄に注意されるのが嫌でしたが、雨の日に自転車の中学生とぶつかってケガをしたことをきっかけに、嫌われてでも妹を守ろうとしていた兄の責任感の強さと思いやりに気付きます。筆者は自身の不注意を反省し、みんなの安全のために堂々と注意できる兄を誇らしく思うようになりました。

この作品には、兄のように、嫌われてでも注意できる勇気ある人になりたいという気持ちの変化がよく表現されていました。

また、不注意による危険性に気付いただけでなく、兄の様子から理解を深め、行動を起こした筆者の姿が描

かかっている点などが高く評価されました。

次に、優秀作（文部科学大臣賞）は、埼玉県の一学生 山本幸奈さんの「きりんさんになる」が受賞しました。この作品は、就学を機に一人で通学するようになった筆者のドキドキする気持ちと家族の約束の話です。

お母さんは、毎朝の登校時に必ず「きりんさんになってね」と声をかけるそうです。これは、きりんのように首を長くして道路の左右を覗き、安全確認をする家族の約束です。この約束を守るだけでなく、「お友だちにも、この合言葉を教えてあげたい」と、他者の安全のためにも行動する姿が描かれており、優れた作品であると評価されました。

続いて優秀作（国務大臣・国家公安委員会委員長賞）のうち、一学生は、東京都 中村心美さんの「こうつう少年団とわたし」が受賞しました。

交通少年団に入団した筆者は、横断歩道を渡る際に手を挙げるのは、ドライバーに気付いてもらうためだと知りました。手を高く挙げて渡ると、止まってくれたドライバーと合わせた目から心が通い合い気持ちがよいこと。家庭では、ヘルメットの紐はカチツと音がするまではめることをお父さんに教え、その音で親子がよいする心地よい経験をしたことが描かれています。また、交通少年団として警察学校にも行き、警察官が厳しい訓練を行う様子に触れました。下校時、つい友だちと走り出してしまいそうになると、真剣に訓練していた警察官の姿を思い出し、「いけない、わたしはこうつう少年団だった」と自らを戒めているそうです。

学んだことを守り実行する素直な気持ちと、交通少年団として誇りを持って安全行動をしようとする姿が見える優れた作品だと評価できます。

二年生では埼玉県 神宮由衣さんの「自てん車」が受賞しました。この作品は、筆者のお母さんが子どもが乗った自転車にぶつかられてケガをしたことをきっかけに、交通事故について話したことを描いた作文です。

事故後、お母さんは子どもたちに自転車の乗り方について話すことにしました。被害者がお年寄りだったら

命に関わっていたかもしれない、自分の家族が事故の加害者になってしまふかもしれないと怖くなったためでした。お母さんの話から、筆者は今後一人で自転車に乗るようになった際には、自分も加害者になるかもしれないことをしっかりと心に留めようと考えたことが描かれています。被害者にも加害者にもなってはならないという、子どもを守りたい母親の教訓が述べられた、優れた作品であると評価されました。

三年生は、愛知県 山田彩晴さんの「交通安全とわたしのちかい」です。この作品は、三年生になってようやく一人で自転車に乗ることが認められるようになった筆者が、大きな道路の隅にお花や菓子が供えられている意味をお父さんから教わった話です。筆者はそこが子どもの死亡事故があった場所だとは知りませんでした。お父さんは車の「死角」に気を付けるようにとも話しました。

筆者は事故で死んでしまった子どもに思いをさせ、自転車には乗りたいけれど怖い気持ちが大きくなっているのを感じたのでした。

筆者はお供えの場所を通るたびに「命の大切さ」を考えるようになり、気を引き締めることを強く胸に刻みました。「大好きな自転車に乗る際は交通ルールをしっかりと守る」という決意が述べられ、筆者の心の動きがよく描かれている作品として評価されました。

四年生は、熊本県 村上まどかさんの「自分の身は自分で守る」です。

筆者は、自分と妹を二年生の初め頃まで徒歩で学校に送っていたお母さんのことを、心配性なのではないかと考えていました。一年生の終わり頃にはお母さんと一緒にいることを恥ずかしく感じ、「もうついて来なくて大丈夫だよ」と伝えたものの、その後もしばらくは一緒にいくことになりました。

一緒に歩いている間に信号の待ち方や角の曲がり方など、注意すべき点を丁寧におさらいしていきました。

このように、地域特有の状況や個別の道で、注意すべき点について具体的な対策を取ることは重要です。また、「心配性のお母さん」という言葉からは親子の愛情が感じられます。子どもたちの安全に対するお母さんの思

いを十分に理解し、安全行動が身についたことが伝わる作品として評価されました。

五年生は、香川県 福山陽樹さんの「家族をもう悲しませない」です。筆者は一年生の時に、横断歩道のな
い道で手を挙げて渡ったところ、気づかずに走って来た車との事故に遭いました。近くにいた姉は泣き、駆け
つけたお母さんも泣きそうでしたが、筆者自身は何が何だかわからずに怖かったといいます。

この事故の経験から、家族で交通安全について話し合い、必ず横断歩道を渡ることを確認しました。そして、
自分自身がルールを守らなければ、家族だけでなく事故の相手も悲しませることになるとよく理解し、二度と
家族を悲しませない、と決意しました。交通安全ルールの守ることの重要性が筆者の心の動きとともに描写されて
おり、他者の気持ちになつて考えることを通して、強い決心が読み取れる優れた作品であると評価されました。

六年生は、徳島県 伊原里咲さんの「大切な妹」です。四月から小学校に上がる妹をもつ筆者は、いつも両
親や自分と手をつないで歩いている妹が一人で登校することを、まるで「両親のような気持ちで妹を見守つて
心配でたまらない」と感じました。そのため、妹だけの交通安全教室を家族で開催することになったそうです。
筆者は妹の姿を通して、自らも両親から学んだ交通安全教育の大切さや、登下校を通して気付いた危険な場所
や交通ルールなど、注意すべきことをふりかえりました。両親が自分を見守り導いてくれたように、今度は自分
が大切な妹を交通事故から守りたい、という温かく強い気持ちが表された優れた作品であると評価されました。
子どもたちは発達段階に応じ、交通安全に対する思いを率直に表現してくれました。子どもたちの気付きは
大人にとつては新鮮であり、感銘を受けるものでもあります。

一つひとつの経験を大切に、交通安全行動を続けてほしいと願っています。

最後になりましたが、多数の応募作品を読み、ご協力くださいました予備審査員の方々、事務局の方々、作
品集作成にご協力くださった関係者の方々には大変お世話になりました。また、本審査会において、真正で厳
正な審査を行ってくださいました審査員の方々に、心よりお礼を申し上げます。

令和5年度交通安全ファミリー作文コンクール審査員 － 小学生の部 －

(敬称略、順不同)

宮田美恵子	NPO 法人日本こどもの安全教育総合研究所理事長
羽 藤 雄 次	足立区子ども安全安心プロジェクトチームリーダー
宮 崎 朋 子	全国公立小・中学校女性校長会会長
入 谷 誠	一般財団法人全日本交通安全協会専務理事
幸 田 徳 之	一般財団法人日本交通安全教育普及協会専務理事
児 玉 克 敏	内閣府政策統括官(政策調整担当) 付参事官(交通安全対策担当)
安里賀奈子	文部科学省総合教育政策局 男女共同参画共生社会学習・安全課長
日 下 真 一	警察庁交通局交通企画課長

中学生の部



福島県郡山市立安積第二中学校

一年 安齋^{あんざい} 真^ま 央^{ひろ}

交通安全家族会議

私にとつての交通安全を考えてみると、自転車を運転する時には「ヘルメットを着用する」、「左側を走行する」など主に、自転車に乗る側の視点での交通安全を一番に考えた。その理由は、中学生になって自転車通学になったからだと思う。では、他の人はどうだろうかと思つた私は、家族と交通安全とは何かについて会議をすることにした。

まず初めに、小学生の妹が考える交通安全は、「信号を守る」、「横断歩道では手を挙げて横断する」など、主に歩行者側の視点での意見が多かつた。

次に、母が考える交通安全は、「かもしれない運転をす
る」、「急のつく運転をしない」、「早めにライトを点灯する」

など主に、車の運転者としての視点での意見が多かつた。

次に、父が考える交通安全は、「出掛けるときは、早めに出発するなど時間に余裕をもつた行動をする」、「夜間出歩く時は、夜光反射材を着用する」との意見であつた。また、人それぞれの交通安全だけではなく、車の自動ブレーキ機能などの企業努力も交通事故防止に繋がっているなどと父は話していた。

このことから分かる通り、それぞれの年齢や立場によつて考える交通安全があることが分かつた。また、そのどれもが守らなければならない交通安全だと思ふ。

では、なぜ交通事故は起るのか。福島県内の交通事故件数を調べてみると、令和四年中に二千七百件を超える人身事故が発生していることが分かつた。これでも減少傾向にあるようだが、なぜこんなにも交通事故が発生するのだろうか。

それについても家族で会議をした。その中には、「疲れや調子の乱れ、それによる注意力の低下が原因なのではないか」、「前は大丈夫だったからという経験で基本が崩れたのではないか」、「自己中心的な考えで行動していたのではないか」、「そもそも交通安全に対するモラルがなく、交通

ルールを守っていない人がいるのではないか」などの意見があった。

この時、ふと私を感じたことがある。それは、大人は事故を起こさないという加害者の視点、子供は事故にあわないという被害者の視点で交通安全を考えていると感じた。それぞれ交通安全のことを考えているのに、まったく逆の視点から考えていると感じた。また、交通事故は、自動車と歩行者の事故だけではなく、自転車と歩行者の事故も考えられることが分かった。それを考えると、自転車通学をしている私も交通事故の加害者になる可能性があることが分かった。今まで、事故にあわないための交通安全を考えていたが、これからは、加害者側の視点での交通安全も意識しなければならぬと感じた。

この会議を通して、私が思う最大の交通安全は、全員が加害者側と被害者側の視点で交通安全を考えることだ。



優秀作

国務大臣・国家公安委員会委員長賞

岡山県倉敷市立真備東中学校

弟の交通安全

一年 仁沢^{にざわ} ひなた

交通には、さまざまなきまりがあります。例えば「赤信号は止まれ」「青信号は進め」「横断歩道は左右を確認してわたる」など、他にもたくさんあります。私たちにとってこのきまりを理解することは簡単ですが、それを理解するのが難しい人はたくさんいると思います。

私の弟は発達障害という病気をかかえています。そのため、買い物などに行った際に、駐車場についたら周りを見ずに飛び出したり、信号を見ずに横断歩道をわたろうとしたりするなど、過去にもこのようなことが何度もありました。今でもまれにこのようなことが見られます。その度に危ないことを両親が説明したり、車をおりる

前には声をかけたり、手をつないだりするなど家族みんなで注意してきました。ですが、弟は言われた時には飛び出したりしないのですが、次の日には忘れてしまい危ない行動をしてしまうことがあります。家族は弟のことと不安になることが多いと感じています。はじめに言ったように私たちが簡単と思っている交通のきまりは、弟にとっては理解するのが難しいのです。そこで私は、信号の色などを理解するのが難しい子たちは何で危ないことが分かるようになるのか考えてみました。横断歩道にある音響信号機のメロディを「わたっていいよ」や「止まってね」など、簡単な言葉にするのいいと思いました。他にも、横断歩道の信号の標識を丸やばつにすると、弟のように障害をかかえている人や、小さい子も分かりやすいと思いました。私の家では電気のスイッチにばつのシールを付けていることで、弟もその電気のスイッチをさわらなくなつたので、信号機も効果はあると思います。この横断歩道のアイデアをお母さんに話したところ、信号機の変更などの相談は警察署の交通課が担当していることを初めて知りました。その時に、信号機の長さやあたらしく標識を作ってもらいたいなど、色々な相談を

できることも知りました。

今回は、弟のことからいろいろアイディアを考えてみたけれど、相談し実現するには、地域みんなの協力が必要だと思います。弟のように障害をかかえている人たちや小さい子、お年よりの方のため、運転する人もしない人も地域のみんなの協力や理解をもっと深めることが大切だと私は思います。いつか、私のアイディアが実現されるといいですね。それまでは、今まで通り弟に声がけをしつかりし弟がけがをしないように注意していきたいと思います。

山口県学校法人萩光塩学院中学校

二年 明賀 洸士郎

運転免許証返納大作戦

今年祖父が自動車の免許証を返納しました。

祖父は今年八一歳になりました。腰が悪く手術してからは、長く歩いたりするのも難しくなりました。

自分のハウスに行くのも軽トラに乗り、車は足代わりとなっていました。

車というのはとても便利であり、楽にどこへでも連れて行ってくれます。運転している本人はしっかり運転できているつもりではあったように思います。

しかし、近所の人が見たりしても危ない運転であったようでした。ちょっとミラーが当たった時も近所さんだから許してくれましたが、自分ではなんともいいように解釈し反省することもなかったと聞きました。

同居の子供（母の姉）がいくら返納をすすめても首を縦に振らず困って、私の母へ相談の電話がありました。

そこで、私の母やいとこ（祖父の孫）も加わり免許証返納大作戦が始まりました。

祖父がどうして自動車の免許を返納しないのか、免許証を失って困ることなどを聞いてみました。

そうすると、自分が病院に行きたい時などに連れて行ってくれないと言うのです。祖父はせっかちで待たされるのが嫌いな性格のようです。しかし祖父の家はいちご農家であり、みんな忙しく働いておりすぐには対応することが出来ないとも言います。

お互いの言い分があることは分かりました。

しかし、他の人から見て危険と思うような運転で車に乗せるわけにはいきません。

一番怖いのは誰かを傷つけてしまうことです。交通事故でもおこしてしまえば、被害者やその家族はもちろんですが加害者とその家族も罪を背負って生きていくことになります。

祖父の言い分を聞いた上で、みんなで話し合いをしました。

祖父が行きたいところに行けなくて困るときは、同居の子供だけでなく、別居の子供、孫も時間があれば一緒に助けあうこと。

お互いが歩み寄れば、祖父もとうとう納得し免許証返納を決意してくれたようです。

今年四月に運転免許証を返納した祖父は家族の協力を得て、免許証がなくても生活できています。競艇のチケット売り場に連れて行ってもらったりもしています。

家族が忙しい時は、仕方なく待っているようですが。

そして何よりも同居であれ、別居であれ家族全員が安心を得ることができ、祖父にも優しくなれてきた気がするそうです。

免許証返納をためらっている方へ、家族としっかり話をしてみることをおすすめしたいです。

福岡県宗像市立自由ヶ丘中学校

三年 伊賀崎望い が さ き のぞみ

命と安全のための輝き

習い事のピアノが終わると、外はもう薄暗くなっている。母の迎えの車に乗り家へ向かっている途中、部活帰りの同じ学校の子とよくすれ違う。ピアノ教室は少し遠い所なのですれ違う子達はほとんど自転車に乗っている。知っている子かな、と車の窓越しに見ても顔はほとんど分からない。でもヘルメットの後ろについている学年カラーの反射材シールが同級生なのか後輩達なのかを教えてくれる。

また、このピアノの帰りの薄暗い時間帯は犬の散歩やウォーキング、ランニングをしている人が多い。遠くからでもよく分かる。それはそういった人達のほとんどが

「反射材を身につけているからだ。反射材のタスキを付けていたり、ランニングウェアやシューズに反射材がついていたり。一度、全身反射材で出来た服を着た小型犬が横断歩道を一生懸命歩いているのを見た時は

「小さいけどゴールデンだね。」

と車内で母と二人、笑いながら渡り終えるのを待っていた事もあった。私は暗くなって外に出る機会がないのだが、明るい色の服装はともかく、目立つ反射材をつけるのは少し恥ずかしいな、と思っていた。

ある時のピアノの帰り道。その日はピアノの後に兄を駅まで迎えに行き、途中買い物をして帰った。外はすっかり真っ暗になっていた。母と兄と私三人、なにげない話をしながら家へと向かう交差点に差し掛かった時だった。

「うわあっ！」

と母と兄が突然大声を上げた。えっ、と思い驚いて周囲を見回すが、特に何もない。しかし、次の瞬間真っ黒な人が横断歩道のない道を横切っていく姿が街灯で照らし出された。暗闇から突然人の姿が浮き出てきた事に私は心臓が飛び出しそうな程驚いた。それは母も兄も同じ

だったようで、更に母は

「あの黒い服の人、一回車の前を渡ろうとしてた…。直前まで全く見えなかった…。」

と呆然とつぶやいた。よくバスの中などで

「夜は明るい色の服や反射材をつけましょう。」

と注意喚起の放送が流れているが、実際に夜間での暗い色の服がこんなにも車から見えにくいとは思ってもしなかった。もう少しで母は事故を起こしていたかもしれない。そんな考えが浮かんできて、その日二度目の恐怖が私の体中に襲いかかった。

今、私の通学カバンには反射材が使われているキーホルダーをつけている。兄達はそれぞれ反射材使用のカバンや部活用のランニングウェアを身につけている。あのピアノの日の経験から、反射材がどれだけ歩行者、運転者を守ってくれているかという事に私達家族は気付かされた。安全の近道は自分の存在を相手にも知ってもらう事。反射材は私達の命や安全を守るために今日も輝いてくれている。

優秀作

文部科学大臣賞

東京都港区立六本木中学校

二年 大久保 美海

かしんとゆだんが事故を生む

「交通事故」この言葉を皆さんは毎日テレビやインターネットで目にしたり聞いたたりしていませんか？世の中には毎日毎日、いろいろな事件や戦争、政治、天気、スポーツなどさまざまなニュースが私たちの元へ情報として伝えられています。その中で交通事故はほとんど毎日と言ってもいいほど伝えられるニュースです。

三年半前の二〇二〇年二月四日七時五十六分そんな毎日たくさんのニュースの中に私の弟が交通事故の被害者として出てしまいました。その日から私の弟はいなくなってしまうました。

私たちが小さいころから教わってきたルールを守って

いての被害でした。当時小学校四年生だった私はどうして教えられてきたルールを守っていたのに弟がこんな目にあわなくてはいけないのかの理由がずっとわからず、道を歩くのも自転車に乗って走るのも怖くて恐ろしくてしかたありません。

そんな思いを抱いていた私が中学校一年生の冬に、私の親や沢山の人たちが事故をなくすため、私の弟の被害を無駄にしないために事故があった場所に交通安全を祈願するモニュメントを制作することになり、怖くて恐ろしかった私もモニュメント制作に勇気を出して手伝いました。

モニュメント制作には本当に沢山の人が手伝ってくれました。弟の思い、こんな事故を無くしたいという思いがこんなにも沢山の人を動かしていることに私は気持ちを感じました。モザイクアート制作には弟の友人やクラスメイト、サツカーのチームメイトなど沢山の人が制作してくれて、私も弟への思いと事故が減る事を願ったメッセージなど、私に出来る限りをやりました。

そんな沢山の思いを見て、その時から私はこう思うようになれました。

「交通事故は一人がルールを守っていても起きてしまう。交通事故がなくなるには、車、バイク、自転車、歩行者すべての人がルールを守ってこそ防げるもの。私は弟が突然事故にあい被害者になってしまった事を伝えて二度とこんな事故が起こらないようにしないといい。」

私は人見知りするのでなかなかうまく伝えることが苦手ですが、これから頑張って交通事故の被害にあうとどれだけ辛く悲しいか伝えていければと思います。

交通事故は私たちが一歩学校の外に出たら一歩家を出たらいつ被害にあってもおかしくない事です。

被害にあわないようにするためにはどうしたらいいか？また自転車に乗るときにはもしかすると加害者になるかもしれない。そうならないようにまずみんながルールを守ってほしいと思います。

これから私たちは大人になり、数年後にはバイクや車の運転も出来るようになります。今までは事故にあう側だった私たちも加害者になってしまう事があります。

私は誰も被害者にも加害者にもなってほしくありません。みんながルールを守り交通事故がなくなる世の中に

なってほしいと心から願っています。

最後に、モニュメントに書かれたメッセージを皆さんに伝えます。

かしんとゆだんが事故を生む
そのいつしゅんが大事だよ
いつでも心にゆとりをもって

佳作

警察庁交通局長賞

香川県坂出市立東部中学校

我が家の「交通安全」

一年 朝倉 茉あ

いつもの通学路。私は、登校中、交差点に足をふみ入れた。その瞬間、建物の死角から進入してきた自動車が目の前に現れた。私はすぐに止まったが、その自動車は、進んでいるのか分からないくらいゆっくりとしたスピードで去っていった。

こんなことが起こったのは一度だけではない。私は毎回、不安と迷いに悩まされる。もし、自動車がきちんと止まってくれていたら、私はスムーズに渡ることができただろう。

このことをきっかけに、私は、歩行者や自動車に関するルールについて調べてみた。先程の状況に関連してい

たのは「歩行者優先」である。思い返せば、警察が駅前の横断歩道などで、交通取り締まりをしているところをよく目にしてきた。取り締まりの件数は、年々増加していると記事に掲載されている。

そこで私は、普段から自動車を運転している母に、登校中での出来事を話した。すると、母も自分の経験を話してくれた。実は母も一度、交通違反で検挙されたことがあった。その時は、腹が立ち、悔しい思いだったが、それ以降、いつも以上に安全運転を心がけるようになったそうだ。母も、危険な運転をしている人をよく見かけるらしい。

「全ての人が緊張感を持って、自動車を運転するようになったらいいね。」
と、母は話した。

私は、この話は自動車だけでなく、自転車を運転する時にも当てはまることに気がついた。最近、ヘルメット着用と自転車保険加入が義務づけられている。ヘルメットを着用することで、事故にあつたとしても、死亡率は低くなることが報告されている。さらに、保険に加入していれば事故をおこしてしまった場合、損害賠償金の一

部を補償してくれることを知った。

しかし、現実はそのようではない。ヘルメットを着用していない人は大勢いる。さらに、ながらスマホ、かさをさしながらの運転…。

「ちょっとくらいいいや」という気持ちでルールを甘くとらえることは、私もある。しかし、登校中での出来事、交通取り締まり、自転車のおそろしさを実感した私は、無自覚なまま大人への道を進んではだめだということに気づかされた。

家族で「交通安全」について話し合った。その結果、我が家の「交通安全」が決定した。「交通安全」とは、「事故にあうわけない」より「事故にあうかもしれない」と緊張感を持つこと。いつ何が起きるか分からないため、毎日正しく行動することが大切だと思う。

「交通ルール」を守ることは、自分や相手の命を守ること。一人ひとりが安全運転を意識して、誰もが安全で充実した生活を送る、そんな世の中になってほしい。私は、今までとは一味違う晴れ晴れとした思いで、交差点に足をふみ入れた。

埼玉県越谷市立南中学校

みんなを守るために…

一年 金子^{かねこ}由奈^{ゆな}

ある日、父の運転する車に乗っていると、父が「危ない」と言いました。何だろうと思つて見てみると高齢者が横断歩道の無い道を渡ろうとしているところでした。幸い、運転者の父も歩行者の高齢者も気付いたので事故にはなりませんでした。その時、私は「危なかったけど何もなくてよかった」と思うくらいでした。また他の日も横断歩道が無いところを自転車で渡っている人がいました。左右を確認して渡ろうとしていましたが、反対側から来ていた車がクラクションを鳴らしていました。もし車や自転車が気付かずにそのまま進んでいたら大きな事故になっていたかもしれないと思い、たくさんの危険があることに改めて気付きました。

そこで、交通安全について家族で話し合うことにしました。まず、どんな場面があつてそこにはどんな危険があるのかあげてみました。「自転車に乗りながらイヤホ

ンで音楽などを聴いている人は、周りの音が聞こえないので車や人が近付いていることに気付かない」「歩道をはみ出して大勢で横に並んで歩いていると車のさまたげになつてぶつかる」「自転車ですごい速いスピードで走っていると歩行者や自転車の急な飛び出しに対応が間に合わない」「左右の確認が不十分で渡ろうとすると車が急に止まらないとぶつかる」「携帯などを見ながら歩いていると周囲の動きに気付かない」などの意見が出ました。父や母は運転するので運転者側の意見を出し、私や妹は歩行者側の意見を出しました。歩行者にとってはそれほど気にせずに行っていることが、運転者にとって危ないと感じることもあると知り、これからは注意して歩行しようと思いました。そして、運転者側も歩行者側もそれぞれが考えて行動しないと交通安全は成り立たないこと、また横断歩道が無いところを渡ったり、交通ルールを守らない人が運転者だけでなく歩行者にもいることが分かりました。「みんながやっているから」や「横断歩道まで面倒だし急いで渡れば大丈夫」など自分は大丈夫と過信して自分勝手な行動をとってしまったのだと思います。横断歩道の無いところを渡って、事故にあう割合

は20%だそうです。その割合を減らすにはどうするべきか、みんなで考えました。「車が急に曲がつてくるかもしれない」や「人が飛び出してくるかもしれない」というように「かもしれない」が大切なのだろうという話になりました。

家族で話し合うことでたくさんのがわかり、最初は他人事のように考えていたことがとても危ないことだと知りました。危ないと思うことを一人で考えていても自分しか守れないけれど、家族で話し危険を共有することで家族を守ることにもつながると思います。これからも交通安全のために危ない場面があれば話し合い、常に「かもしれない」を心に交通ルールを守っていききたいと思いました。

静岡県静岡市立城内中学校

二年 安倍あべ 夏希なつき

やめませんか？歩きスマホ

私が通っている塾の行く道には、赤から青までに変わる時間が長い信号機がある。周りを見渡すと学校帰りの自転車に乗った高校生や会社帰りの人が皆信号機の前に立っていて、スマホを見ているのである。信号機の色が青に変わった。しかし、その人達は青色に変わっても変わらず下を向いてスマホをのぞきながら信号を渡っていた。

この出来事の数ヶ月前、私は母に「歩きスマホは絶対にしたらだめ！」という忠告を受けていた。だが私は、スマホを見ながら信号を渡ってしまった。その日の夜、私が無気なくテレビを見ていると、歩きスマホをしている人が車が来ているのに気が付かず、そのまま渡ってしまったが、ギリギリで車にはねられないで済んだという映像を見た。そこで私はある事に気づいた。あの時、この人みたいに気付かず進んでいたらどうなっていたん

だろう？車が突然違う方向から来たら？この人は助かったけれど、もしも車が止まってくれなかったら？私は、そんなことを考えてしまっただけで、その日の夜はあまりよく眠れなかった。

次の日、母と歩きスマホについて話しあった。「歩きスマホってどうしてやってしまうのかな？」と私が問うと、母は「自分の欲にたえられないからじゃないのかな？」と答えた。緊急な場合でもメールを送ったりする時間は三十秒もかからない。だがSNSやコミュニケーションツールは、みればみるほどおもしろくなっていくから、そちらに集中して歩きスマホをしてしまおうと思うと母は付け足した。私も母の意見に激しく同意したので、私はもう絶対自分の欲にも負けないし、しっかり右左を見て信号を渡ろうと決意した。

次の塾の帰り私は、スマホをリュックの中に入れて、しっかりと前を向いて歩き出した。周りの人は相変わらずスマホを見ていたけれど、私はスマホを一度もさわらなかった。どうしてもあの日見た歩きスマホの人と車の映像がよみがえってくるのだ。

やったぞ！私は自分の欲に勝つたのだ！そんな気持ち

で右左をしつかり確認し、信号を渡りきることができた。あれ以来私は歩きスマホを一度もしていない。私は、歩きスマホをやめることができたが、周りの人がやめないう限りは、あまり意味がない。私はどうにかして歩きスマホの恐ろしさをいろんな人に知ってほしいと常々思っている。

徳島県立城ノ内中等教育学校

二年 森 一 翔

「思い合う心」をもって

小学校六年間、僕は徒歩通学だった。登校班の班長をしていた僕は、車や自転車の邪魔にならないよう、注意を払って先頭を歩いていた。昨年、中高一貫校に入学し、通学距離が片道八キロ程あるため主に車通学となった。小学校の時とは違い、運転する母の隣で座っているだけでよい。高校生になるまでに徐々に自転車通学へと切り替える約束だ。そして一年経った今、僕は中学二年生と

なり自転車で登校する機会が増えた。

気楽な車通学とは違い、再び注意を払っての登校となった。徒歩よりスピードの出る自転車では、より他の通行者と接触しないよう気をつけなければならぬ。歩行者が飛び出してこないか、車は曲がって来ていないか、地面に段差はないか気を張り詰めていた。だが自転車登校が増えるにつれ、慣れた道を無意識に走行している時もある。その危険を自覚し、もう一度気を引きしめなければならぬと最近思っていた。

そんな中、母の車が事故に巻き込まれた。その日は車での送迎だった。その帰り道、母が渋滞で停止しているところ、「バンッ」という音の後、車を衝撃が襲ったそうだと確認された。と悟った母はバックミラーで後続車の様子を確かめ、すぐ横のガソリンスタンドへ車を移動させた。二台の車が続いて入ってきたことから、三台の玉突き事故だとわかったそう。各々が車を停め車外に出ると「大丈夫ですか？ケガはありませんか？」と声を掛け合ったそう。三台目の人が「すみません。私の不注意です。」と母たちに謝り、二台目の人は「もっと自分が車間距離を空けていれば…」と母に謝ったそう。母は車間距

離を十分とっていたため、前の車に追突せずに済んだ。母は僕の送迎に、他の二人は通勤によく使う道で起きた事故だった。

その話を母から聞いた時、まず母が無事でよかったと安心した。次に、慣れた道で家族が事故に遭ったことから、今までどこか他人事のように思っていた事故を身近に感じた。改めて自転車での登校時に気をつけなくてはと強く思った。同時に、お互いを気遣い合う温かい心を感じた。

このことを母に伝えると「事故が起きた時は負傷者救護が一番と義務付けられているんだよ。」と教えてくれた。また車間距離を十分とることも教習所で習うそうだった。それを聞き、僕は交通ルールとは自分の身を守るだけでなく、他人の身も守るものだとすることに気付いた。命を一番に考えることは人として当然だ。さらに母が車間距離をとっていないければ、前の車も巻き込んでいただろう。交通ルールを守ったことで四台の事故になることを防いだのだ。そして交通ルールとは、事故で悲しく苦しむ思いをする人をなくすため、思いやりの心を形にしたものではないかとも思った。

道路は歩行者や自転車、バイク、車など様々な人が利用している。交通手段は違うが、全員がお互いのことを思って通行することが大切だ。そのためには一方だけが「思いやる」のではなく、道を利用する全ての人が「思い合う」ことが必要である。これからも僕は様々な方法で道路を利用していく。その時は必ず「思い合う心」を忘れずに通行していきたい。

鹿児島県鹿児島大学教育学部附属中学校

三年 揚野望咲

私と自転車

私は、自転車に乗れない。幼い頃、友だちに教えてもらったことはあるが、どうしてもうまく乗ることができず、諦めてしまった。あれから何年も経ったが、今でも私が自転車に乗ることはない。しかし私の中で、自転車に対する見方は大きく変化した。そのきっかけは、二回の交通安全教室だった。

小学生のとき、交通安全教室で自転車について指導を受ける機会があった。自転車を持っている児童は、それを学校に持っていき、校庭で交通ルールや点検の仕方などを教えてもらおうという教室だった。同級生は、交差点や曲がり角などの場面に合わせて、考えて自転車を乗りこなしていた。一方、自転車に乗れない児童は、校庭の隅で見学をさせられた。私を含め、数人の児童はすることがなく、ただ同級生を眺めていることしかできなかった。普段自転車を利用している人たちにとってはとてもためになる時間だったはずだ。しかし、私たちからしたらどうだろう。当時の私は、正直、意味のない時間だと感じた。

それから数年が経ち、中学校に入学して、また交通安全教室を受ける機会があった。今度は、体育館に集まって全員でお話を聞いた。その時のテーマは、「自転車事故について」だった。テーマがテーマだったため、私は小学校での交通安全教室を思い出し、少しネガティブな気持ちで臨んでしまった。しかし、私が想像していた内容とは大きく違っていた。

「自転車事故は、自転車に乗る人だけでなく歩行者も気をつける必要がある」という説明から始まり、実際に

起きた事故の例や事故を防ぐために大切なことについての詳しいお話を聞いた。今まで、他人事と捉えて目を向けようとしてこなかった自転車事故。その多くが歩行者にも関連していると知り、大きな衝撃を受けた。車道を通る、ヘルメットを着用しなければならぬ……。自転車に乗る人だけが気をつけなければならないのだと思っていた。全くそんなことはなかった。私も、普段から注意するべきだったのだ。そのことに気づいてからは、あの小学校での交通安全教室でも、何か学びを得ることができたのではないかと考えるようになった。

これらの経験から、私は、もつと多くの人に「自転車事故は、歩行者も気をつけなければならない」ということを知ってもらい、安全意識に繋げてほしいと考えた。私のように、自転車について詳しく知らない人も多いはずだ。坂道での速度も、ブレーキが利くまでにかかる時間も、乗ったことがないから分からないのだ。

「私と自転車は関係ない」と思っている人も少なくないと思う。しかし、交通安全教室などを通して、自転車について知っておくことはとても大切だ。歩行者の意識も高めることが、自転車事故を減らすことに繋がると思う。

福島県いわき市立小名浜第二中学校

三年 遠藤 悠真

あつたらいいな「五つ目のマーク」

「運転中、ヒヤツとした経験はあるか？」あるネット記事によると、九十六パーセントの人が運転中ヒヤツとした経験があると回答している。僕も両親に聞いてみると、何度も危ない事はあつたと教えてくれた。

僕も車に乗っていた時、ヒヤツとした経験がある。それは今年の春休みに母と病院に行った帰り道のことだ。ある車が母の車を物凄いスピードで追い越そうとして、衝突しそうになったのだ。僕はこの時初めて命の危険を感じた。それと同時に、相手のドライバーに対し、強い怒りで頭に血が上る程だった。高速道路ではなく、普通の県道だ。どうせ信号で止まるのに、どうしてそこまでスピードを出して追い越そうとするのか。僕には全く理解出来ない。以前テレビのニュースで見た話だが、高速道路で悪質ドライバーが因縁をつけて暴力をふるったり、わざと車を停車させて後続車と追突事故が起きたり、

マナーの悪いドライバーによる事故は多い。ニュースや新聞で見えて知っていたつもりだが、いざ実際に自分が経験すると、段違いの怖さだ。

病院の帰り道、母が、

「世の中にはマナー違反やモラルに欠けている人、身勝手な人は沢山いる。お母さんみたいに運転が下手な人は特に気を付けて運転しなくちゃね。運転が苦手な人のマークがあれば良いのにな。」

と話していた。

現在、運転者が使うマークは四種類ある。一つ目は運転免許取得後、一年未満のドライバーが使う「初心者マーク」。二つ目は、七十歳以上の人が努力義務で付ける「高齢運転者マーク」。三つ目は、蝶の形状で耳の不自由な人の為の「聴覚障害者マーク」。四つ目は、身体が不自由な人の為の「身体障害者マーク」だ。これはクローバーの形状である。蝶の形状（聴覚障害者マーク）やクローバーのマーク（身体障害者マーク）はあまり見かけないので、もしかしたら知らない人もいるかもしれない。

僕の母の様に、運転が苦手な人は大勢いるだろう。そんな人達の為にも五つ目のマーク「運転未熟者マーク」

の様な物があつたらどうか。運転が苦手という事を周囲の車に知らせる事が出来、注意も促す事が出来る。「マーク」は、人に何かを伝える為のサインだと思う。「五つ目のマーク」は架空のマークだが近い将来、いつかこの「運転未熟者マーク」が実現すればとても嬉しい。

マークを付ける事で周知させるのも大事だが、一番はドライバーの心構えや思いやり、そして譲り合う気持ちが大切だ。これは交通社会以外でも、学校や会社にも共通する。僕も三年後には運転免許を取得する予定だ。その時は交通ルールを守り、思いやりと譲り合う気持ちを大切にすると大人になりたい。

徳島県立城ノ内中等教育学校

三年

里吉さとよし

悠馬はるま

父とヘルメット

僕の弟は、生まれていなかったかもしれない。

僕の父は、若い頃、僕がまだ母のお腹の中にいたとき

に、交通事故に遭ったそうだった。当時父は職場までバイクで通っており、事故当日も、バイクで家まで帰ろうとしていたという。父は前の車の後ろについて走行しており、交差点で、右折してきた車がそれに気づかずはね飛ばされてしまったらしい。父は骨折し、仕事を約六週間も休むほどの大怪我を負ってしまったという。いつも仕事熱心な父がそんなに長い期間休んだと聞くと、どれほどひどい怪我だったかが、ひしひしと伝わってくる。でも、父は死にはしなかった。ヘルメットが、飛ばされた父の頭を守ってくれたからだ。ヘルメットがなければ、僕には父親も弟もいなかっただろう。ヘルメットは、僕の家族を守ってくれたとても大切なものだ。

この事故の話を聞いて、僕は改めてヘルメットをつけるような心がけたいと思った。僕は自転車でも外出するとき、いつもヘルメットをつけている。でもそれは、以前までは、学校でつけるように言われていたからだ。今は万が一事故に遭っても頭を守れるように、命を守れるようにつけている。

二〇二三年四月から、ヘルメット着用が努力義務化された。その理由は、「流通科学大学」によると、自転車

事故で死亡した人の七割が、頭部に致命傷を負っていると言われているから、また、ヘルメットを着用していない場合の致死率は、着用時の二・三倍も高くなることからわかっているかららしい。しかし、この努力義務化で、ヘルメットをつけるようにしている、し始めたという人は、ほとんどいないだろう。理由として考えられるのは、努力義務化されてまだ浅いから、罰則がないから、つけるのが面倒くさいと考えている人が多いからといったことだ。とはいえ、国がこのまま何も行わず放置しているのは、人の気持ちは変わらず、今と状況はほとんど変わらないだろう。状況を変え、みんながヘルメットをつけるようにするためには、義務化が手っ取り早く、最も効果的だ。だが、僕はそれではダメだと思う。なぜなら、義務化すると、ヘルメット着用の理由が、「命を守るため」ではなく、「罰則を受けたくないから」になってしまふと感じるからだ。そういった理由を持つ人々は、警察など、監視し、罰則を受けさせる側がない状態では、ヘルメットをつけずに自転車で行くと考えられる。そうなれば、また重大な事故が起き、本末転倒だ。

だから、大事なのは、国に頼って国を理由に行動する

ことではなく、僕たち一人一人が、交通安全に興味をもつことだと思う。多くの人が、「自分は大丈夫」と過信しているのではないか。でも、交通事故は、意外と身近だ。僕の父が巻き込まれたように、いつ、どこで起こるかわからない。動画サイトを見るのに使っているその貴重な時間を、少しでも交通安全について知り、自分がどう行動すべきか考える時間に見てみてはどうだろうか。

審査を終えて

千葉大学名誉教授 鈴木 春男

中学生の部

一月四日に警察庁から発表された速報によりますと、昨年（令和五年）に全国で起きた交通事故による死者数は二千六百七十八人で、前年より六十八人の増加となっています。毎年減少してきた数値が八年ぶりに増加に転じたという残念な結果になりました。昨年は五月に新型コロナウイルス感染症の位置づけが二類から五類に移るなど、新型コロナウイルスによる行動制限が緩和され、社会活動が活発化したのが一因と考えられます。

それでも死者数が一番多かった昭和四十五年の一万六千七百六十五人に比べると十六%を切っており、六分の一以下になっているわけですから、これは官民が多方面から連携して取り組んでいる交通事故防止対策のすばらしい成果だと見ることができます。しかし他方で、年間三千人近い方々が依然として悲惨な交通事故で亡くなっているという事実にも注目しなければなりません。そしてそうした悲惨な事故を無くすためには国民一人一人が自ら進んで交通安全を守ろうとする自発的な行動が不可欠です。

交通安全ファミリー作文コンクール「中学生の部」は、そうした自発的な交通安全行動を動機づける貴重な場である「家庭・学校・地域」の中で、重要な役割を演じてもらわなければならない中学生の意見が伝えられ、本人はもちろん多くの方々に交通安全の重要性に気付いてもらう機会を提供する大事な事業です。

本年度、何よりも喜ばしいのは、応募数が増大に転じたことです。応募作品は、学校を通じて提出されるケースが多いために、新型コロナウイルスの流行は応募数にも悪影響を及ぼしてきました。授業がオンラインで行われ

るようになったり、少なくなった授業時間数の中で、多くの科目を学ばねばならない状況が生じたと思われる。そうした中で、やっと流行も治まり授業も正常に行われるようになったことが背景にあるように思われます。具体的には、本年度の応募総数は四千八十九点（中学一年生・千八百三点、二年生・千三百十九点、三年生・九百三十六点、学年不明三十一點）で、前年度の三千六百十四点（中学一年生・千三百八十五点、二年生・千三百六十一點、三年生・八百五十三點、学年不明十五點）に比べて一割以上多くなっています。四千八十九人も中学生が一生懸命交通安全の問題を考え、すばらしい作文を提出いただいたわけであり、ご本人はもちろん、ご父母、ご指導いただいた先生方、またそれぞれの学校ならびに関係者の方々に心からの感謝を申し上げます。そして次年度は更に応募数が高まることを期待したいと思えます。

今回の審査では、その応募作品の中から、教職経験者や編集経験者、国語の免許取得者等五名の審査員による予備審査を経て、一次審査に中学一年生、二年生、三年生それぞれ十点ずつ、計三十点が残され、それを本審査会（七名で構成）審査員が事前に評価して「審査評価集計表」としてまとめ、さらにその「審査評価集計表」を基に審査員全員出席の審査会で厳正な審査・討議を重ねました。その結果、最優秀作（内閣総理大臣賞）一点、優秀作（国務大臣・国家公安委員会委員長賞）各学年一点計三点、優秀作（文部科学大臣賞）一点、佳作（警察庁交通局長賞）七点が選ばれました。そして、最終的には最優秀作および優秀作は警察庁長官、佳作については警察庁交通局長により決定されました。

最優秀作（内閣総理大臣賞）は、福島県の中学一年生、安齋真央さんの「交通安全家族会議」でした。父母と四人家族の中で交通安全を考える場を家族会議という形で表現し、自転車通学の自分も、被害者の立場だけ考えがちだったが、加害者になる可能性もあることを例に、安全のためには加害者、被害者という一方的な立場ではなく双方の視点で考える必要があることが述べられていて素晴らしいと思いました。

次に、優秀作（国務大臣・国家公安委員会委員長賞）ですが、中学一年生からは岡山県の仁沢ひなたさんの「弟

の交通安全」が選ばれました。障害者など弱者に対する交通安全をどのように進めるかのアイデアを独自の立場から展開した説得力のある文章でした。弟への思いやりと事故を防ごうという気持ちが強く感じられました。

中学二年生からは山口県の明賀洸士郎さんの「運転免許証返納大作戦」が選ばれました。免許証返納に踏み切れない祖父に向けて、家族、親族、孫たちが話し合い、協力し合い、祖父の足になって助け合うことで、免許証返納に至るプロセスがとてもよく示されており、返納をためらっている高齢者には、家族との話し合いが大事なことを述べている文章でした。

中学三年生からは福岡県の伊賀崎望さんの「命と安全のための輝き」が選ばれました。夜道で兄と一緒に母の運転する車で走行した際、黒い服装の横断者が見えず危険を感じた体験から、反射材着用の必要性を生きた文章で描いた素晴らしい作品でした。

優秀作（文部科学大臣賞）には、東京都の中学二年生、大久保美海さんの「かしんとゆだんが事故を生む」が選ばれました。ルールを守っていたにもかかわらず交通事故で亡くなった弟。姉としてその不条理に対するやりきれない気持ちが強く示されていました。そしてその中から、弟の被害を無駄にしないためのコミュニケーション作り、多くの人の協力を得ることができ、そこから事故防止に立ち上がったっていく姿がよく描かれている文章でした。佳作（警察庁交通局長賞）には以下の七作品が選ばれました。香川県の中学一年生、朝倉茉央さんの「我が家の『交通安全』」は、横断歩道で停まってくれない車を見て、横断歩道上での交通ルールを調べたり、自転車利用のルールを調べたりしながら、家族で交通安全への心構えを決めていく姿が述べられていてよい作品だと感じました。

埼玉県の中学一年生、金子由奈さんの「みんなを守るために……」は、家族同士で、どんなケースで事故が起こるのかを挙げ、それを運転者の立場と歩行者の立場の双方から検討している点が素晴らしく、相手の立場から考えることで自分が注意するようになることが述べられていました。

静岡県の中学二年生、安倍夏希さんの「やめませんか？歩きスマホ」は、歩きスマホの危険性をテレビの映像で見た筆者が、何故それやってしまうのかを母と話し合い、そこから自分は絶対やらないと決意し、その為の手段としてリュックの中にして歩くようにした過程がよく描かれていました。

徳島県の中学二年生、森一翔さんの「『思い合う心』をもって」は、母の運転する車が受けた追突事故をきっかけに、交通ルールの重要性に気付いた筆者が、交通ルールとはお互いの思いやりの気持ちを形にしたものだ。そして一方だけが思いやるのではなく、双方が思い合うことが大事なのだ、と結論付けた点が素晴らしいと感じました。

鹿児島県の中学三年生、揚野望咲さんの「私と自転車」は、自転車に乗らない筆者が中学校での交通安全教室で自転車事故の話聞き、自分とは関係ないものと考えていた自転車事故が、歩行者としての自分の立場と深い関係のあることに気付く。その自分自身の問題と考えるプロセスが上手に描かれていました。

福島県の中学三年生、遠藤悠真さんの「あつたらいいな『五つ目のマーク』」は、「運転未熟者マーク」を新設したらという提案が面白いと感じました。私は未熟な運転手ですから車や人は気をつけてください、と意思表示することは、他者の注意を期待するともに、自分をも同時に動機づけるという考え方がいいと感じました。

徳島県の中学三年生、里吉悠馬さんの「父とヘルメット」は、バイクで右折事故にあった父がヘルメットを着用していたことで命が助かったことを通じ、自転車でもヘルメット着用が大事なことを述べ、それと併せて、着用の努力義務化の背景には罰則による強制ではなく、着用の意味の自覚が必要なのが述べられている点もよかったです。

最後に、数多くの応募作品の読み込みと絞り込みにご尽力いただいた予備審査員および事務局の方々、さらにもっと本審査会において真剣かつ厳正な審査に当たっていただいた審査員の方々に心からのお礼を申し上げます。審査の報告とさせていただきます。

令和5年度交通安全ファミリー作文コンクール審査員
－ 中学生の部 －

(敬称略、順不同)

鈴木 春 男	千葉大学名誉教授
溝 端 光 雄	交通評論家
齊 藤 正 富	全日本中学校長会会長
吉 岡 耀 子	交通ジャーナリスト
友 竹 明 彦	公益財団法人三井住友海上福祉財団専務理事
安里賀奈子	文部科学省総合教育政策局 男女共同参画共生社会学習・安全課長
日 下 真 一	警察庁交通局交通企画課長

※本作品集に掲載する作文は、作者の体験に基づく作品のオリジナリティを尊重する見地から、明確な誤字等以外は原文のまま掲載しています。

本作品集の転載については、次の条件をいずれも満たす場合に限り認めることとします。

- ①交通安全知識の普及、交通安全思想の高揚のために使用すること。
- ②営利を目的としないこと。
- ③転載誌(紙)等を警察庁交通局交通企画課担当あてに送付すること。

令和5年度交通安全ファミリー作文コンクール
優秀作品集

令和6年2月

発行 警察庁

〒100-8974 東京都千代田区霞が関 2-1-2

